仙台市文化財調査報告書第56集

仙台市
高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ

昭和58年3月

仙台市教育委員会
仙台市交通局

仙台市文化財調査報告書第56集

仙台市
高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ

昭和58年3月

仙台市教育委員会
仙台市交通局

序　　文

仙台市高速鉄道建設に係る埋蔵文化財の本格的な発掘調査は、昭和56年から開始され、今年で３年目を迎えるに至っています。これまで「下ノ内遺跡」の縄文時代中頃の集落跡の発見、泉崎・中谷地・鳥居原地区の調査では、プラントオパール分析法にもとづく水田跡の発見など貴重な成果を得ております。

本報告は、今年度（昭和57年）調査した成果について、そのあらましを速報として公表するものであります。

こうした貴重な文化財の保存・継承は、現代に生きるわたくしたちに課せられた重要な責務と考えます。今後とも、みなさま方の御理解ある御協力と御助言を御願い申し上げます。

最後に、発掘調査や本報告書刊行に当り、多くの方々の御協力をいただきました。ここに心から感謝を申し上げ序といたします。

昭和58年３月

仙台市教育委員会
教育長　藤井　黎

例　　言

1．本書は、仙台市高速鉄道南北線関係遺跡に係る下ノ内遺跡・泉崎前遺跡・泉崎浦遺跡・中谷地遺跡・鳥居原遺跡における昭和57年度の遺跡発掘調査概報である。

2．本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆　篠原信彦……Ⅰ・Ⅲ
吉岡恭平……Ⅳ・Ⅴ
高橋勝也……Ⅵ
斎野裕彦……Ⅱ・Ⅶ1～3
荒井　格……Ⅶ4

遺構トレース　吉岡、斎野、高橋、鈴木　実、藤沢　敦、古屋敷則雄、織内　登、松木　仁、佐藤　博、古川陸子

土器実測　篠原、渡辺忠彦、藤沢、古屋敷、毛利貴洋、後藤　修、大友　透

土器トレース　藤沢、古川

石器実測　荒井、鄧　聡、藤田　淳

石器トレース　藤田

遺構写真撮影　篠原、吉岡、高橋、斎野、荒井、渡辺、鈴木、田中則和、主浜光朗

遺物写真撮影　鈴木、渡辺、毛利

遺物拓影　古川、山寺槙子、千葉きよ子、吉田雅之

遺物接合・補修　渡辺、毛利、後藤、織内、吉田、古川、山寺、千葉、松本幸子、斎藤美弥子

編集は篠原・吉岡・斎野・荒井・高橋が行った。

3．本書中の土色については「新版標準土色帳」(小山・佐原：1970) を使用した。

4．本書中の泉崎前・中谷地・鳥居原遺跡は新発見の遺跡であり、この調査成果に基き、分布地図を改訂中であるが、今回は従前のまま使用した。

5．調査にあたっては次の方々の御教示と御助言を賜った。（五十音順、敬称略）

書上元博(東北大学)、加藤強(仙台中央食肉卸売市場ＫＫ)、佐々木章(大分短期大学)、庄司駒男(東北大学)、庄子貞雄(東北大学)、須藤隆(東北大学)、畑中建一(北九州大学)、藤下典之(大阪府立大学)、藤原宏志(宮崎大学)、星川清親(東北大学)、松谷暁子（城西歯科大学)、松本秀明(東北大学)、三好教夫(岡山理科大学)、森本岩太郎(聖マリアンナ医科大学)、安田喜憲(広島大学)、山田格(東北大学)、山田一郎(東北大学)

本　文　目　次

序　　文
例　　言
Ⅰ．調査経過…… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境…… 4
Ⅲ．下ノ内遺跡…… 5
　1．調査の方法　　2．調査の概要
　3．まとめ
Ⅳ．泉崎前遺跡……33
　1．遺跡の立地　　2．調査の方法
　3．調査の概要　　4．まとめ
Ⅴ．泉崎浦遺跡……34
　1．遺跡の立地　　2．調査の方法
　3．調査の概要　　4．まとめ
Ⅵ．中谷地遺跡……46
　1．遺跡の立地　　2．調査の方法
　3．調査の概要
Ⅶ．鳥居原遺跡……50
　1．遺跡の立地　　2．調査の方法
　3．層位　　4．調査の概要

挿図・表目次

第１図　調査区位置図…… 2
第２図　遺跡の位置と周辺遺跡…… 3
下ノ内遺跡
第３図　グリッド配置図…… 5
第４図　遺構配置図……7・ 8
第５図　７号住居跡……9・10
第６図　出土遺物(1)……12
第７図　出土遺物(2)……13
第８図　出土遺物(3)……14
第９図　出土遺物(4)（７号住居跡）……15
第10図　８号住居跡……18
第11図　出土遺物(5)……19
泉崎前・泉崎浦遺跡
第12図　泉崎前遺跡全体図・断面図
　杭列平面図、泉崎浦遺跡全体
　図・断面図……35・36
第13図　泉崎浦遺跡墓壙群平面図
　１号住居跡平面図・出土遺物……38

中谷地遺跡
第14図　基本層位……46
第15図　遺構平面図……47・48
鳥居原遺跡
第16図　試掘調査区平面図……51・52
第17図　本調査区平面図……51・52
第18図　大畦断面図……51・52
第１表　本調査一覧表……１
第２表　試掘調査一覧表……１

写真図版目次

下ノ内遺跡
写真１　縄文時代の遺構全景……23
写真２　７号住居跡（１号炉）全景……23
写真３　７号住居跡（２号炉）全景……23
写真４　７号住居跡２号炉……24
写真５　５号住居跡全景……24
写真６　５号住居跡出土遺物……24
写真７　１号埋設土器遺構……25
写真８　２号埋設土器遺構……25
写真９　古墳～平安時代の遺構全景……25
写真10　８号住居跡全景……26
写真11　９号住居跡全景……26
写真12　９号住居跡カマド全景……26
写真13　10号住居跡全景……27
写真14　６号竪穴遺構全景……27
写真15　51号土壙全景……27
写真16　２号掘立柱建物跡全景……28
写真17　３号・４号掘立柱建物跡全景……28
写真18　５号掘立柱建物跡全景……28
写真19　出土遺物(1)……29
写真20　出土遺物(2)……30
写真21　出土遺物(3)……31
写真22　出土遺物(4)……32
泉崎前遺跡
写真23　水田跡Ⅰ検出状況……40
写真24　水田跡Ⅱ検出状況……40
写真25　東壁土層断面……41
写真26　11層検出畦畔状遺構……41
写真27　杭列……41
泉崎浦遺跡
写真28　墓壙群……42
写真29　７号墓壙人骨検出状況……42
写真30　４号墓壙副葬品検出状況……42
写真31　１号住居跡全景……43
写真32　水田跡Ⅰ畦畔検出状況……43
写真33　水田跡Ⅰ足跡検出状況……43
写真34　水田跡Ⅰ牛足跡検出状況……44
写真35　水田跡Ⅰ人足跡検出状況……44
写真36　水田跡Ⅱ畦畔断面……44
写真37　泉崎前・泉崎浦遺跡出土遺物……45
中谷地遺跡
写真38　Ⅰ区中世と思われる水田跡全景…49
写真39　Ⅰ区平安時代の水田跡全景……49
写真40　Ⅱ区平安時代の水田跡全景……49
鳥居原遺跡
写真41　畦検出状況……51・52
写真42　本調査区全景……51・52
写真43　畦検出状況……51・52
写真44　土層断面（試掘トレンチNo.6）‥51・52

Ⅰ. 調 査 経 過

仙台市高速鉄道南北線建設に伴う発掘調査は、昭和56年度に開始され、本年度は２年目を迎えた。調査の対象地区は仙台市南部の長町・富沢・大野田地区に限定された。この地区は、遺跡が多く分布し、最近の調査によって重層構造の遺跡が多い場所として知られている。

昭和57年度の調査計画は、本調査が昨年度から継続の下ノ内遺跡、試掘調査が鍋田工区から泉崎東工区に至る約１kmの範囲である。

下ノ内遺跡は、迂回道路「下ノ内・六反田線」及び高速鉄道本線敷の一部を調査し、縄文から平安時代の竪穴住居跡等の各遺構が発見された。

試掘調査は、泉崎東・中谷地・鍋田工区の順に開始した。昭和57年４月、泉崎東工区の西隣りに位置する山口遺跡（仙台市民体育館建設に伴う発掘調査）で、土壌分析を実施し、イネのプラントオパールが多量に発見され、古い時代の水田が営まれた可能性が極めて強いという分析結果が呈示された。その後、山口遺跡において中世・平安時代の水田跡の発見が発端となり、名取川・広瀬川によって形成された後背湿地も水田跡が発見されることは十分予想された。試掘調査地区でも山口遺跡同様の分析結果であり、水田の畦畔が各地区で検出され、新発見の遺跡として泉崎前・中谷地・鳥居原遺跡を登録して本調査へ移行した。一方、泉崎浦遺跡では、試掘調査で竪穴住居跡・水田跡の畦畔が検出され、本調査へ移行した。

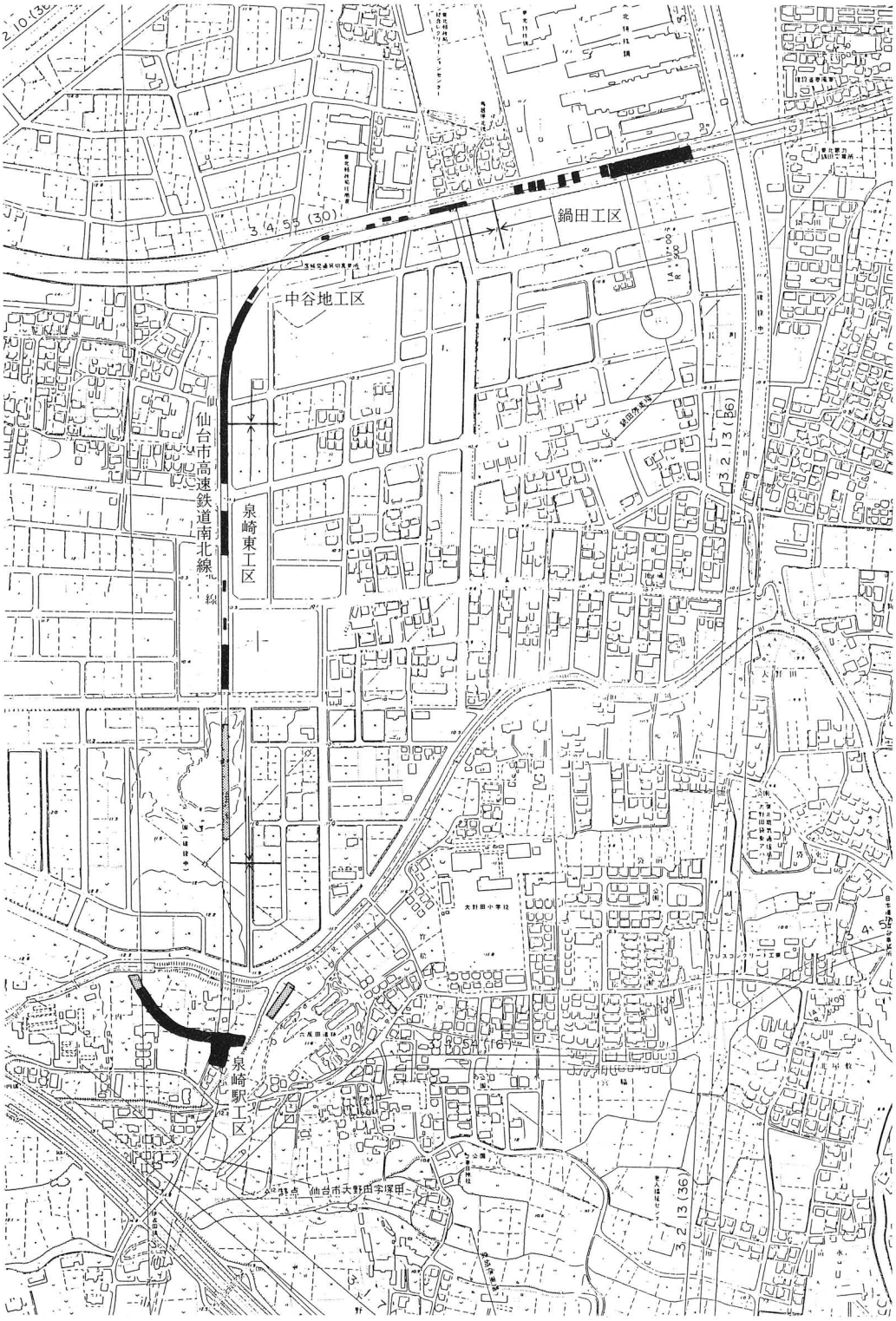
調査にあたっては、仙台市交通局高速鉄道建設本部と度々にわたって協議を行ない、昭和58年２月16日、泉崎東工区の調査を最後に本年度分の調査を終了した。

第１表　本調査一覧表

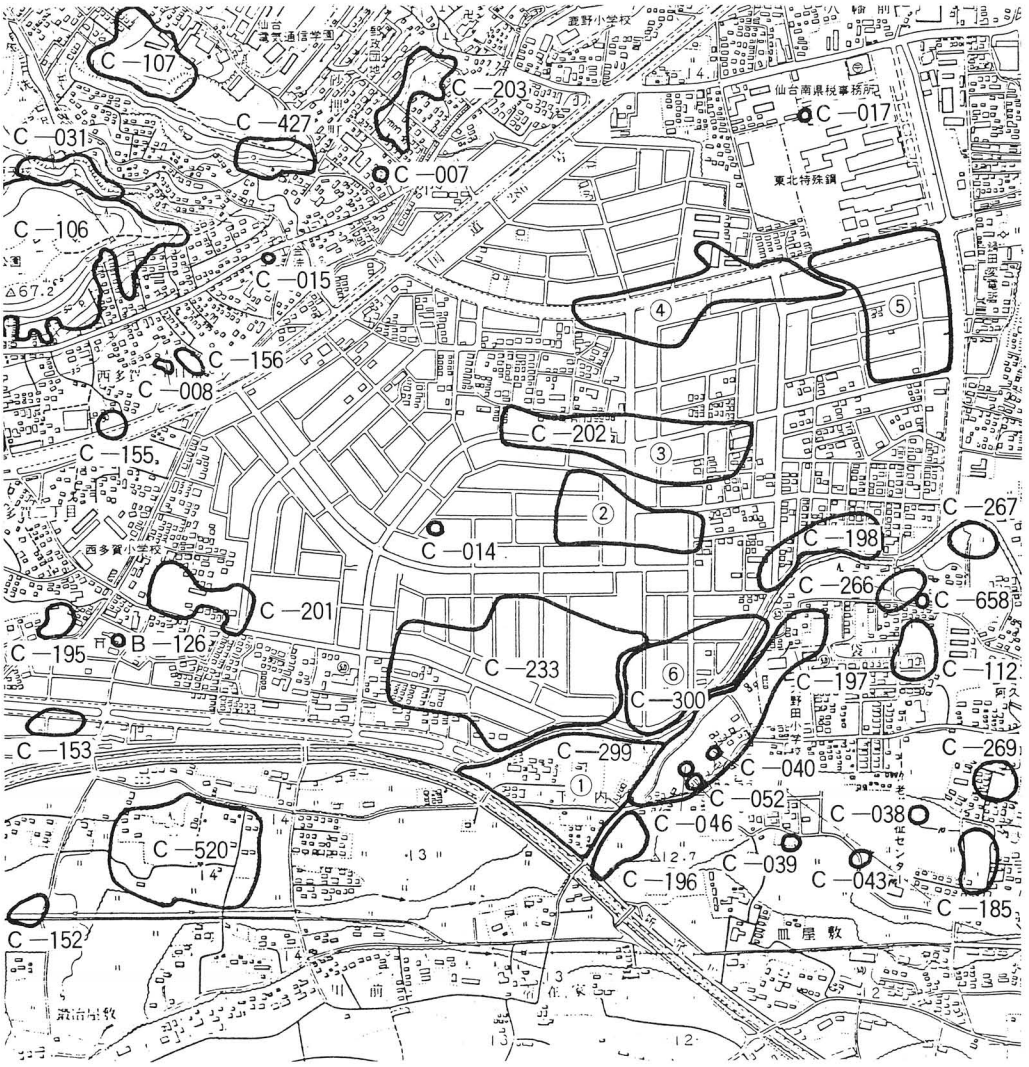
遺跡名 所在地	時代 種類	調査期間	調査面積	担当職員	備考
下ノ内遺跡 仙台市富沢四丁目	縄文～平安 集落跡	S57.4.12～S57.12.25	2,200㎡	篠原信彦・渡辺忠彦 鈴木　実	泉崎駅工区
泉崎前遺跡 仙台市泉崎一丁目	平安以前・平安・中世 水田跡	S57.9.1～S57.12.11	600㎡	吉岡恭平	泉崎東工区
泉崎浦遺跡 仙台市泉崎一丁目	縄文・古墳・平安・江戸 集落跡・水田跡・墓	S57.9.13～S57.12.25 S58.1.5～S58.2.16	1,200㎡	吉岡恭平・田中則和	
中谷地遺跡 仙台市長町南三丁目	平安・中世 水田跡	S57.8.25～S57.12.23	1,850㎡	高橋勝也・主浜光朗	中谷地工区
鳥居原遺跡 仙台市長町南三丁目１他	平安以前・平安 水田跡	S57.10.5～S57.12.25 S58.2.3～S58.2.12	1,300㎡	斎野裕彦・荒井　格	鍋田工区

第２表　試掘調査一覧表

高速鉄道建設工区	調査期間	試掘面積	発見遺構	担当職員	備考
泉崎東工区	S57.4.12～S57.7.1	480㎡	竪穴住居跡、水田跡	吉岡・斎野・荒井・高橋	本調査へ移行
中谷地工区	S57.6.4～S57.12.11	710㎡	水田跡	吉岡・高橋・主浜	〃
鍋田工区	S57.7.5～S57.10.4	350㎡	水田跡	斎野・荒井	〃
泉崎駅工区	S57.10.25～S57.11.26	280㎡		篠原・渡辺	
車庫工区	S57.10.25～S57.11.4	72㎡		篠原・渡辺	



第１図　調査区位置図



遺跡番号	遺跡名称	所属時期	遺跡番号	遺跡名称	所属時期
C－299	①下ノ内遺跡	縄文(中・後)、弥生、古墳～平安	C－106	三神峯遺跡	旧石器、縄文(早・前・中)
	②泉崎前遺跡		C－107	芦ノ口遺跡	平安
C－202	③泉崎浦遺跡	縄文(後)、奈良、平安	C－112	大野田遺跡	縄文(後)、奈良、平安
	④中谷地遺跡		C－152	鍛冶屋敷A遺跡	奈良、平安
	⑤鳥居原遺跡		C－153	堀ノ内遺跡	
C－300	⑥下ノ内浦遺跡		C－155	原東遺跡	
C－007	砂押古墳	古墳	C－156	裏町東遺跡	
C－008	裏町古墳	古墳	C－195	富沢上ノ台遺跡	奈良、平安
C－014	教塚古墳	古墳	C－196	伊古田遺跡	奈良、平安
C－015	金洗沢古墳	古墳	C－197	六反田遺跡	縄文(中・後・晩)、弥生、古墳、奈良、平安
C－017	金岡八幡古墳	古墳	C－198	袋東遺跡	古墳、奈良、平安
C－031	土手内横穴群	奈良、平安	C－201	富沢清水遺跡	奈良、平安
C－038	王の壇古墳	古墳	C－203	砂押屋敷遺跡	平安
C－039	春日社古墳	古墳	C－233	山口遺跡	縄文(中・後)、弥生、古墳、奈良、平安
C－040	五反田古墳	古墳	C－266	元袋Ⅱ遺跡	縄文(後)、奈良、平安
C－043	鳥居塚古墳	古墳	C－427	土手内窯跡	平安
C－046	五反田箱式石棺	古墳	C－520	富沢館跡	奈良、平安、中世
C－052	五反田木棺墓	古墳	C－658	元袋古碑群	

第２図　遺跡の位置と周辺遺跡

Ⅱ．遺跡の立地と環境

仙台市高速鉄道南北線は、七北田を起点とし、七北田丘陵、仙台市街地をのせる段丘群を南下し、広瀬橋付近から宮城野海岸平野(註1)へ入り、終点泉崎に至る。今年度の調査は宮城野海岸平野の中の郡山低地(註2)において行なわれた。郡山低地は北東縁を広瀬川、南縁を名取川、北西縁を長町―利府線(註3)により画されている。ここには広瀬・名取両河川により形成された自然堤防、後背湿地が見られる。自然堤防は広瀬川右岸、名取川左岸に見られ、特に名取川左岸には旧笊川が曲流しており、名取川と共に自然堤防を良好に発達させている。また郡山低地の中央には南北に走る自然堤防が見られる。これら自然堤防の背後には後背湿地が広がっている。

調査対象区域は、郡山低地の中でもその西半部である。ここには北半の鳥居原、中谷地、泉崎に広範な後背湿地が広がり、南半の下ノ内、大野田には自然堤防が見られる。調査は、以下の５遺跡で行なわれた。北半の後背湿地に立地する遺跡では、鳥居原遺跡(鍋田工区)、中谷地遺跡(中谷地工区)、泉崎前遺跡（泉崎東工区）がある。中谷地遺跡と泉崎前遺跡の間には泉崎浦遺跡（泉崎東工区）があり、泉崎の集落をのせる扇状地の東端(註4)の微高地に立地し、一部後背湿地を含む。南半では旧笊川右岸の自然堤防に立地する下ノ内遺跡（泉崎駅工区）がある。

この郡山低地西半部及びその周辺は、仙台市内でも数多くの遺跡が分布する地域である。昭和51～53年度に調査された六反田遺跡では、沖積平野においては県内で最も古い縄文時代中期中葉（大木８ｂ式期）の竪穴住居跡や、後期初頭の竪穴住居跡、古墳・奈良・平安時代の竪穴住居跡等が検出されている。また昭和53・56・57年度に調査された山口遺跡では、縄文時代早期後半の遺物、中期・後期の土壙等、弥生時代の遺物、奈良・平安時代の竪穴住居跡、平安時代・中世の水田跡が検出されており、両遺跡とも重層構造の遺跡である。これらのことにより、両遺跡周辺においても同様の遺構・遺物が発見される可能性は高く、かつ重層構造であると考えられる。その他には縄文時代の遺跡として三神峯遺跡・大野田遺跡・天袋Ⅱ遺跡などがある。古墳時代の遺跡は数多く、西多賀周辺には裏町古墳・金洗沢古墳・今年度調査された砂押古墳等が、大野田には鳥居塚古墳・王の壇古墳・春日社古墳、昨年度調査された大野田１号・２号古墳等がある。また、鳥居原遺跡の北には金岡八幡古墳が、泉崎前遺跡の西方には教塚古墳がある。奈良・平安時代の遺跡では今年度調査された下ノ内浦遺跡等がある。中世では新笊川の南に富沢館跡がある。

尚、郡山低地西半部は旧来自然堤防上に集落や畑が営まれ、後背湿地には水田が広がっていたが、近年土地区画整理が行なわれ、宅地化が急速に進み、その景観は変貌の一途をたどっている。

Ⅲ．下ノ内遺跡

１．調査の方法

３×３ｍのグリッドを基本とし、Ⅰ区は、南北にＡ～Ｒ、東西に１～39、Ⅱ区はⅠ区の東側に接続して東西にＡ～Ｎ、南北に０～15グリッドを設定し、調査を実施した(第３図)。

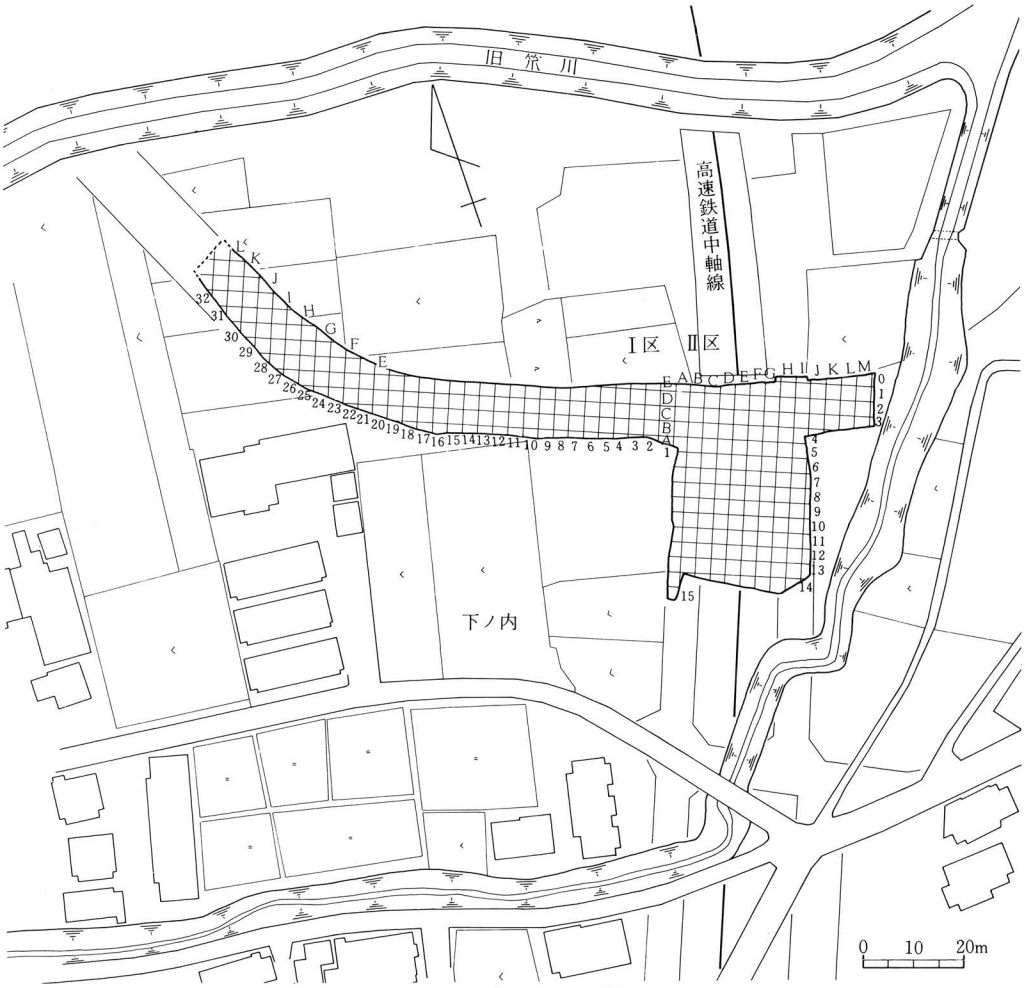
２．調査の概要

Ａ．縄文時代の遺構と遺物

(1) 発見遺構

竪穴住居跡

Ⅰ区23～30グリッドで３軒が検出され、東側より６号・５号・７号住居跡として調査を実施した。尚、６号住居跡は昨年度の継続調査である。炉は３軒とも複式炉であり、６号・７号住居跡の床面には部分的に河原石を敷きならべている。



第３図　グリッド配置図

７号住居跡（第５図、写真２～４）

〔**遺構の確認**〕　Ⅰ区Ｈ・Ｉ－28～30グリッドの第Ⅻ層（褐色シルト層）及び第XIII層（褐色砂層）で検出された。

〔**重複・増改築**〕　第Ⅱ層上面で確認された１号河川跡に西側の一部が削平されている。さらに住居跡堆積土５層上面に炉が構築されている。

床面上において炉が2基、ピット40が検出されている。炉は重複しており、ピットの中にも重複しているものがみられることより、改築しているものと考えられる。

〔**平面形・規模**〕　長軸６ｍ、短軸(残存長)5.3ｍのほぼ円形で、長軸は南北方向である。

〔**堆積土**〕　６層に大別される。

１層（明黄褐色シルト層）　最上層である。住居跡の北側を除きほぼ全体に堆積している。

２層（にぶい黄褐色粘土質シルト層）　住居跡の壁際を除きほぼ全体に堆積している。

３層（褐色シルト層）　住居跡の北側から東側にかけて堆積しており、多量の炭化物を混入する。

４層（にぶい黄橙・黄褐色粘土質シルト層）　住居跡全体に堆積しており、中に少量の炭化物を混入する。

５層（黒褐色シルト層）　住居跡全体に堆積しており、住居跡中央部の床面を覆っている。多量の炭化物を混入し、縄文土器、石器が多数出土している。

６層（褐色砂質シルト層）　ほぼ床面全体を覆っている層で、北側から西側にかけて壁際に厚く堆積している。炭化物を少量混入し、縄文土器、石器が多数出土している。

〔**壁**〕　第Ⅻ・XIII層及び部分的に砂礫層を壁としている。壁は西壁が１号河川跡によって削平された以外は良好に残存しており、壁高は北壁で約45cm、東壁・南壁で約40cmで、床面より急角度で立ち上がる。

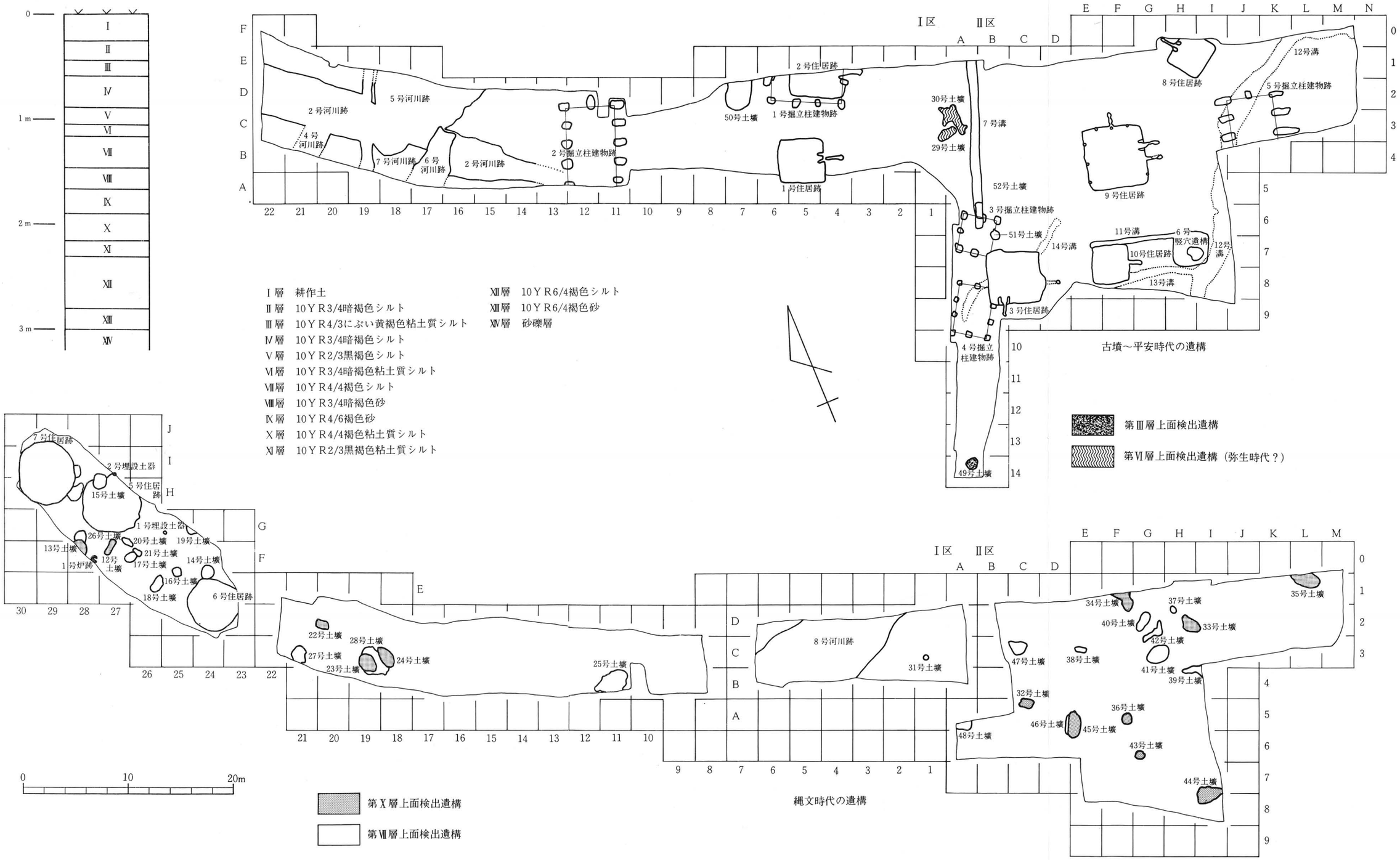
〔**床面**〕　敷石、黄褐色･白色の砂を床面としている。敷石は床面全体に敷かれているものではなく、炉の北側、住居跡中央部から北側の広範囲に見られる。径20cm前後の河原石の平坦な面を上にして敷きならべている場合が多い。さらに部分的に大きな石と石との隙間は５cm位の小石で埋められている。床面は炉の周辺がやや堅くなっている以外は柔らかである。

〔**柱穴**〕　40のピットが確認されているが、柱痕跡があるものはない。規模、堆積土よりP_{15}・P_{16}・P_{19}・P_{20}・P_{26}・P_{27}・P_{29}・P_{32}・P_{33}・P_{36}・P_{38}が主柱穴と考えられる。さらに壁際のピットは壁柱穴かと考えられる。

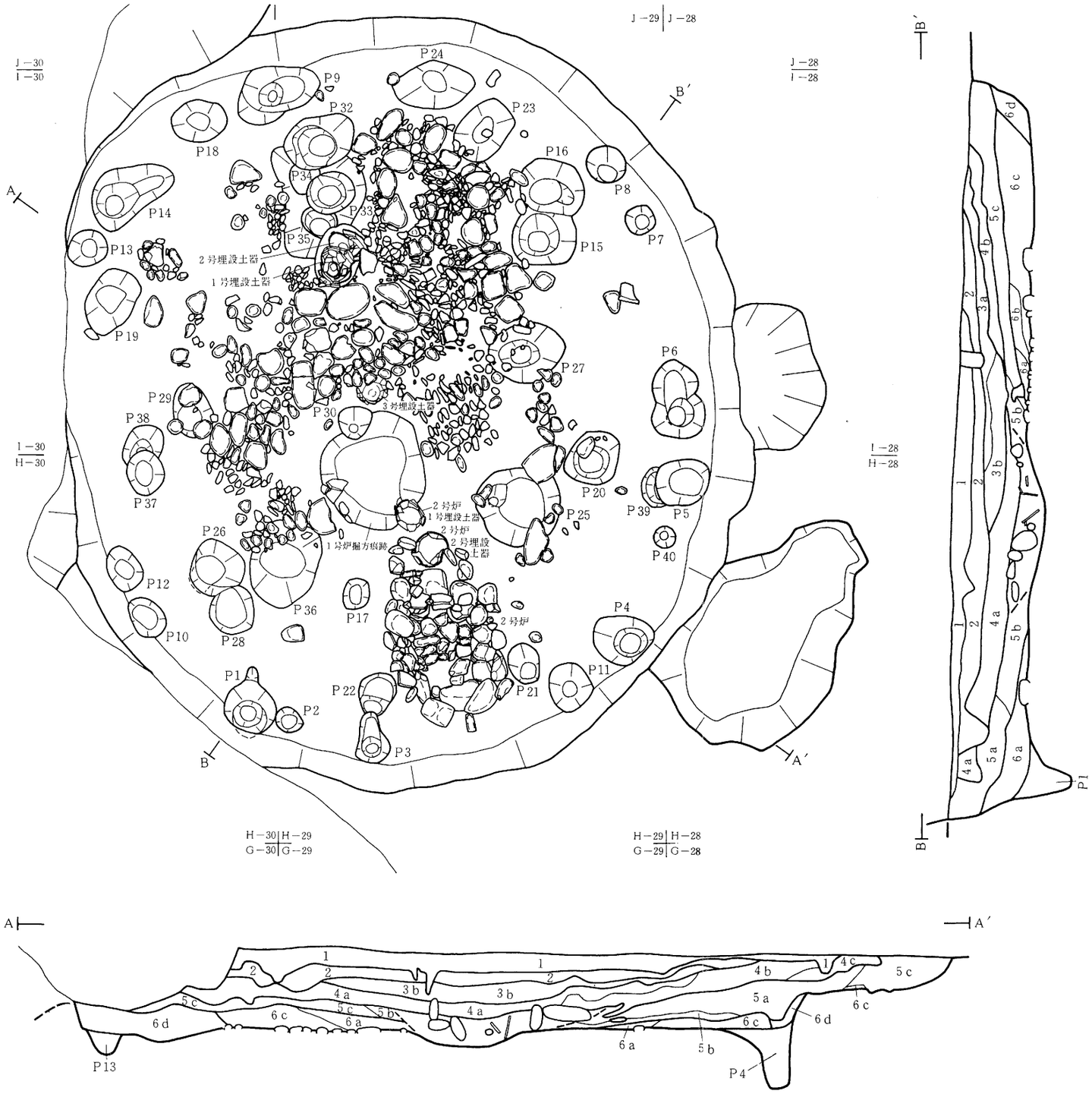
〔**周溝**〕　確認されなかった。

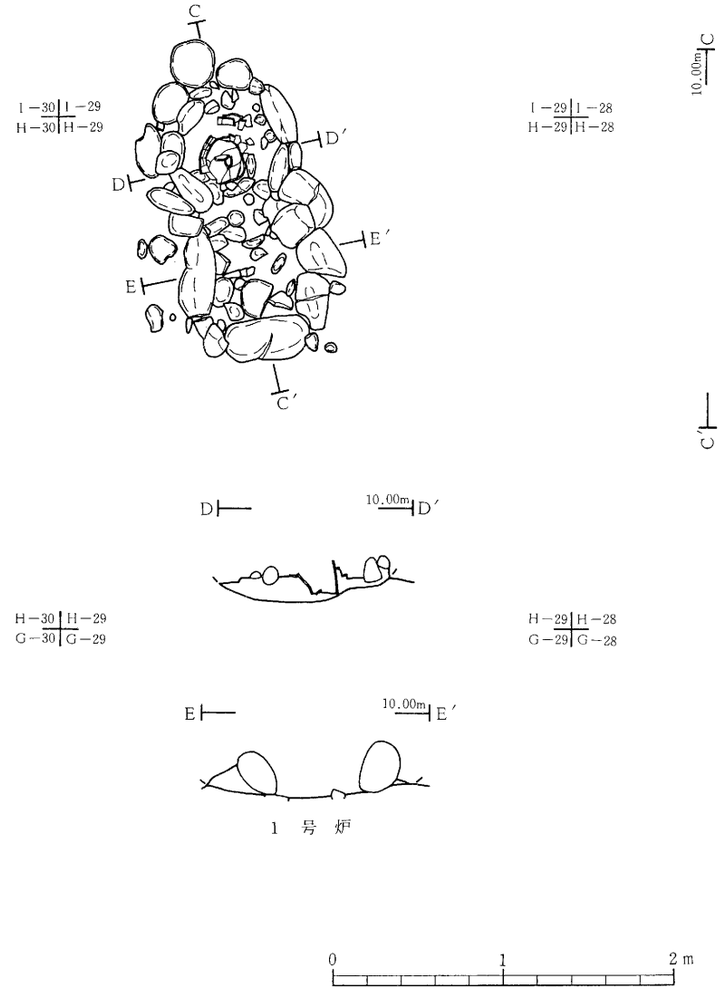
〔**炉**〕　３基がある。

１号炉　堆積土５層上面で確認され、床面より約20cm浮いている。このことからこの炉は７


Ⅰ層　耕作土
Ⅱ層　10ＹＲ3/4暗褐色シルト
Ⅲ層　10ＹＲ4/3にぶい黄褐色粘土質シルト
Ⅳ層　10ＹＲ3/4暗褐色シルト
Ⅴ層　10ＹＲ2/3黒褐色シルト
Ⅵ層　10ＹＲ3/4暗褐色粘土質シルト
Ⅶ層　10ＹＲ4/4褐色シルト
Ⅷ層　10ＹＲ3/4暗褐色砂
Ⅸ層　10ＹＲ4/6褐色砂
Ⅹ層　10ＹＲ4/4褐色粘土質シルト
Ⅺ層　10ＹＲ2/3黒褐色粘土質シルト
Ⅻ層　10ＹＲ6/4褐色シルト
ⅩⅢ層　10ＹＲ6/4褐色砂
ⅩⅣ層　砂礫層
Ⅰ区
Ⅱ区
古墳～平安時代の遺構
縄文時代の遺構
第Ⅲ層上面検出遺構
第Ⅵ層上面検出遺構（弥生時代？）
第Ⅹ層上面検出遺構
第Ⅶ層上面検出遺構
2号河川跡
5号河川跡
4号河川跡
7号河川跡
6号河川跡
2号掘立柱建物跡
2号住居跡
50号土壙
1号掘立柱建物跡
1号住居跡
30号土壙
29号土壙
7号溝
52号土壙
3号掘立柱建物跡
51号土壙
14号溝
4号掘立柱建物跡
49号土壙
3号住居跡
8号住居跡
12号溝
5号掘立柱建物跡
9号住居跡
11号溝
6号竪穴遺構
10号住居跡
12号溝
13号溝
7号住居跡
2号埋設土器
5号住居跡
15号土壙
1号埋設土器
26号土壙
20号土壙
19号土壙
13号土壙
21号土壙
12号土壙
17号土壙
14号土壙
1号炉跡
16号土壙
18号土壙
6号住居跡
22号土壙
28号土壙
27号土壙
23号土壙
24号土壙
25号土壙
8号河川跡
31号土壙
34号土壙
37号土壙
35号土壙
40号土壙
33号土壙
42号土壙
47号土壙
38号土壙
41号土壙
39号土壙
32号土壙
36号土壙
46号土壙
45号土壙
48号土壙
43号土壙
44号土壙

第4図　遺構配置図





層位	土　　色	土　性	備　　考
1	10YR9/6明黄褐色	シルト	炭化物を少量含む
2	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む
3 a	10YR5/4褐　色	シルト	炭化物を多量、土器片を含む
3 b	10YR5/4褐　色	シルト	小石を含む
4 a	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	石、少量の炭化物を含む
4 b	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む
4 c	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物を多量に含む
5 a	10YR3/2黒 褐 色	シルト	炭化物、土器片、石を多量に含む
5 b	10YR3/2黒 褐 色	シルト	炭化物を多量、砂を少量含む
5 c	10YR3/3暗 褐 色	シルト	炭化物、砂を少量含む
6 a	10YR3/3暗 褐 色	砂質シルト	炭化物、少量の砂を含む
6 b	10YR5/4褐　色	砂質シルト	ガラス質
6 c	10YR5/4褐　色	砂質シルト	炭化物、石を含む
6 d	10YR5/4褐　色	砂質シルト	白色小粒子を含む

第５図　７号住居跡実測図

号住居跡と直接関連するものではないと判断される。炉の規模は長軸1.95m 、短軸1.0m で、土器埋設石組部と敷石石組部から構成される複式炉で、主軸は南北方向である。堆積土は、多量の炭化物、焼土が混じる暗灰黄色・黒褐色シルトで、敷石石組部の奥壁、側壁の石はかなり火熱を受け、もろくなっている。なお、堆積土５層上面では、床面、ピット等が確認されておらず、別個の住居跡に付属するものか単独のものかは判断しかねる。

２号炉　１号炉の直下に位置し、本住居跡に伴う炉である。炉の規模は長軸1.7m 、短軸0.9m で、主軸は１号炉同様南北方向である。土器埋設部２組、敷石石組部から構成される複式炉である。構築方法は長軸1.8m 、短軸1.0m の楕円形の掘り方に埋設土器を埋め、石組部を作っている。埋設土器、敷石石組部の堆積土は多量の炭化物、焼土が混じる暗褐色シルトが殆どで、埋設土器内外、敷石石組部の奥壁、側壁の石はかなりの火熱を受けてもろくなっている。埋設土器２個体は共に口縁部及び底部を欠損している。

３号炉　２号炉と重複し、２号炉の北隣りに位置する。上面には黄褐色砂で薄く覆われている。敷石石組部は、敷石部分が残存するだけで側・奥壁の石は取り除かれている。掘り方は長軸の残存長83cm、短軸80cmの楕円形である。堆積土は炭化物、焼土が混じる褐色シルトで、敷石石組の石はかなり火熱を受けてもろくなっている。

〔その他の施設〕　２号炉の主軸方向延長上に埋設土器３基がある。P_{33} を切って１号埋設土器（第６図２）・２号埋設土器（写真19の４）が重複している。３号埋設土器は３号炉の北隣りの敷石下で検出されている。１号埋設土器は２号埋設土器の一部を壊し、土器片を底面に敷き、その上に底部欠損した深鉢を埋めている。堆積土には別個体の底部２個体が入っている。３号埋設土器の堆積土は多量の炭化物、焼土が混じる黒褐色シルトである。

さらに住居跡の東側には、長軸2.0m 、短軸1.2m の楕円形の土壙状の張り出し部が確認されている。住居跡との重複関係は見られず、堆積土は住居跡堆積土５層と同一層である。底面は舟底形を呈し、住居跡床面より約20cm高く、住居跡の出入口の可能性がある。

〔遺物の出土状況〕　堆積土各層より縄文土器（第８図１～９）片、石器(第９図、写真21)が出土している。特に堆積土５層・６層から多く出土している。住居跡の年代を決定する資料は、２号炉及び床面上の埋設土器（第６図、写真19の１～４)、床面出土のものである。

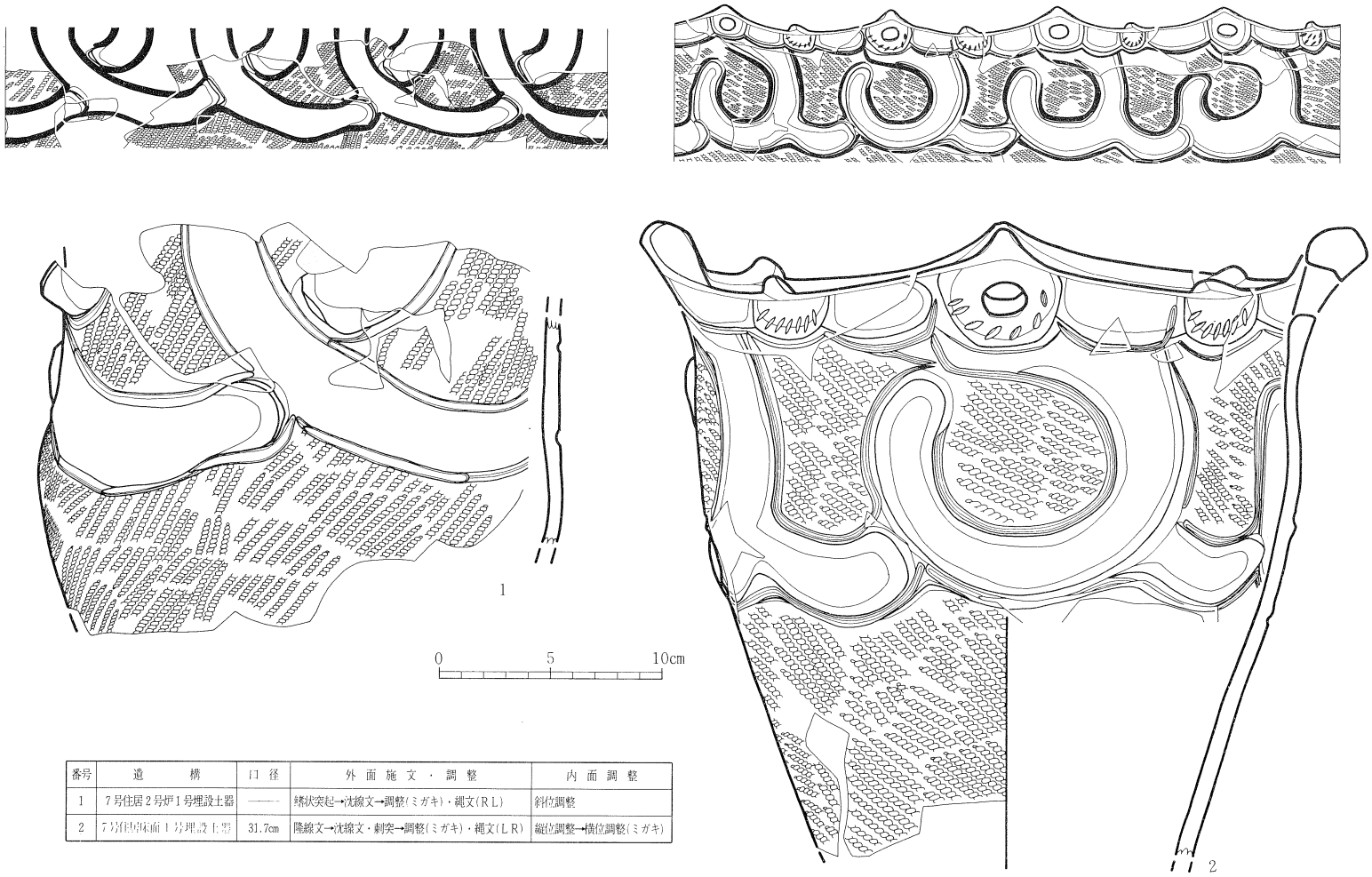
埋設土器遺構

２基が検出され、確認面は１号が第Ⅻ層、２号が第Ⅹ層である。

１号埋設土器遺構（写真７）

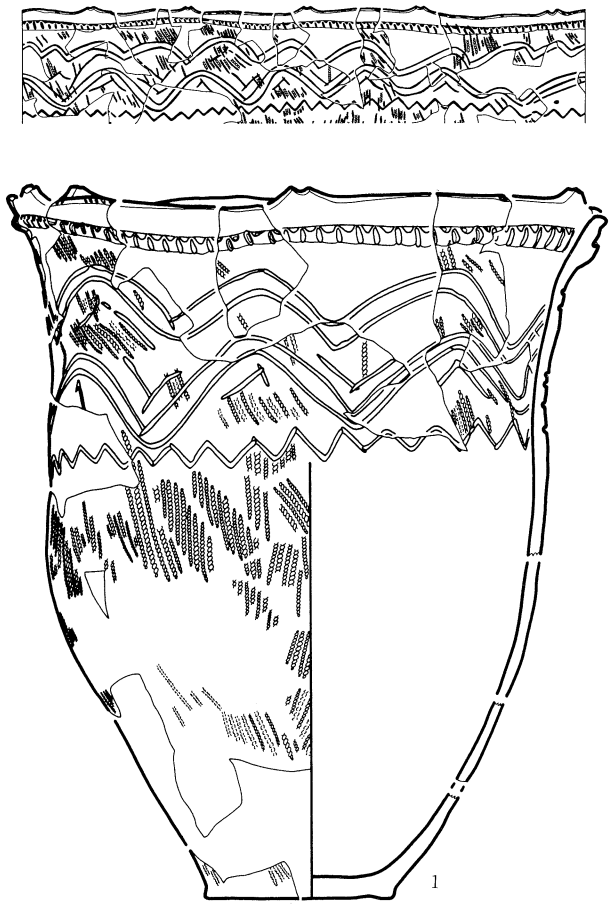
Ⅰ区Ｇ－25グリッドで検出され、５号住居跡の東側に位置している。直径43cmのほぼ円形の掘り方に口縁部が欠損する縄文土器（写真20の１）を埋めている。掘り方の深さは48cmである。

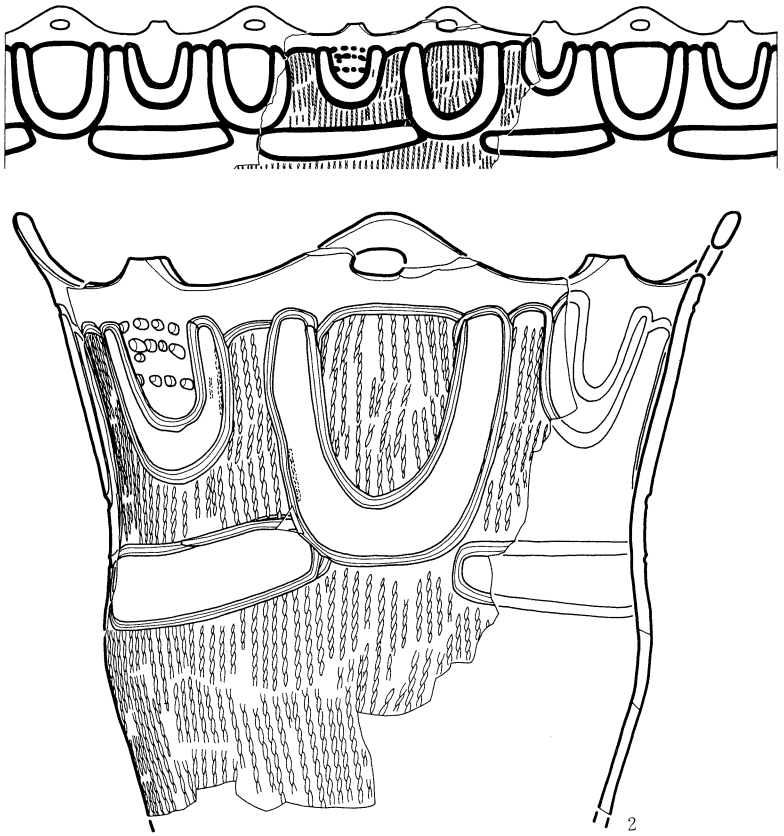
２号埋設土器遺構（写真８）

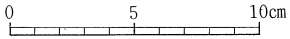


番号	遺　　構	口 径	外 面 施 文 ・ 調 整	内 面 調 整
1	7号住居2号炉1号埋設土器	――	縒状突起→沈線文→調整(ミガキ)・縄文(RL)	斜位調整
2	7号住居床面1号埋設土器	31.7cm	隆線文→沈線文・刺突→調整(ミガキ)・縄文(LR)	縦位調整→横位調整(ミガキ)

第6図　出　土　遺　物 (1)

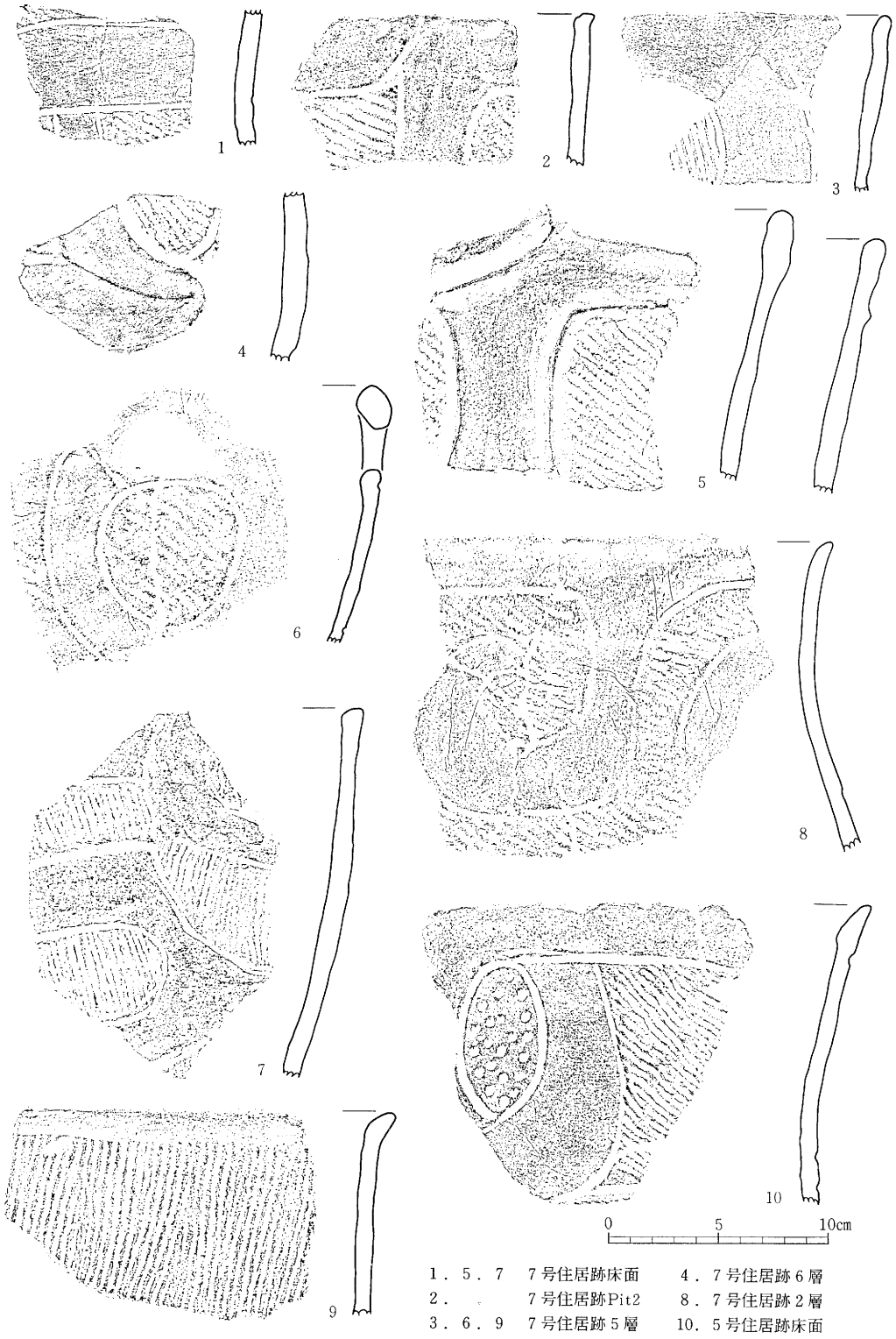






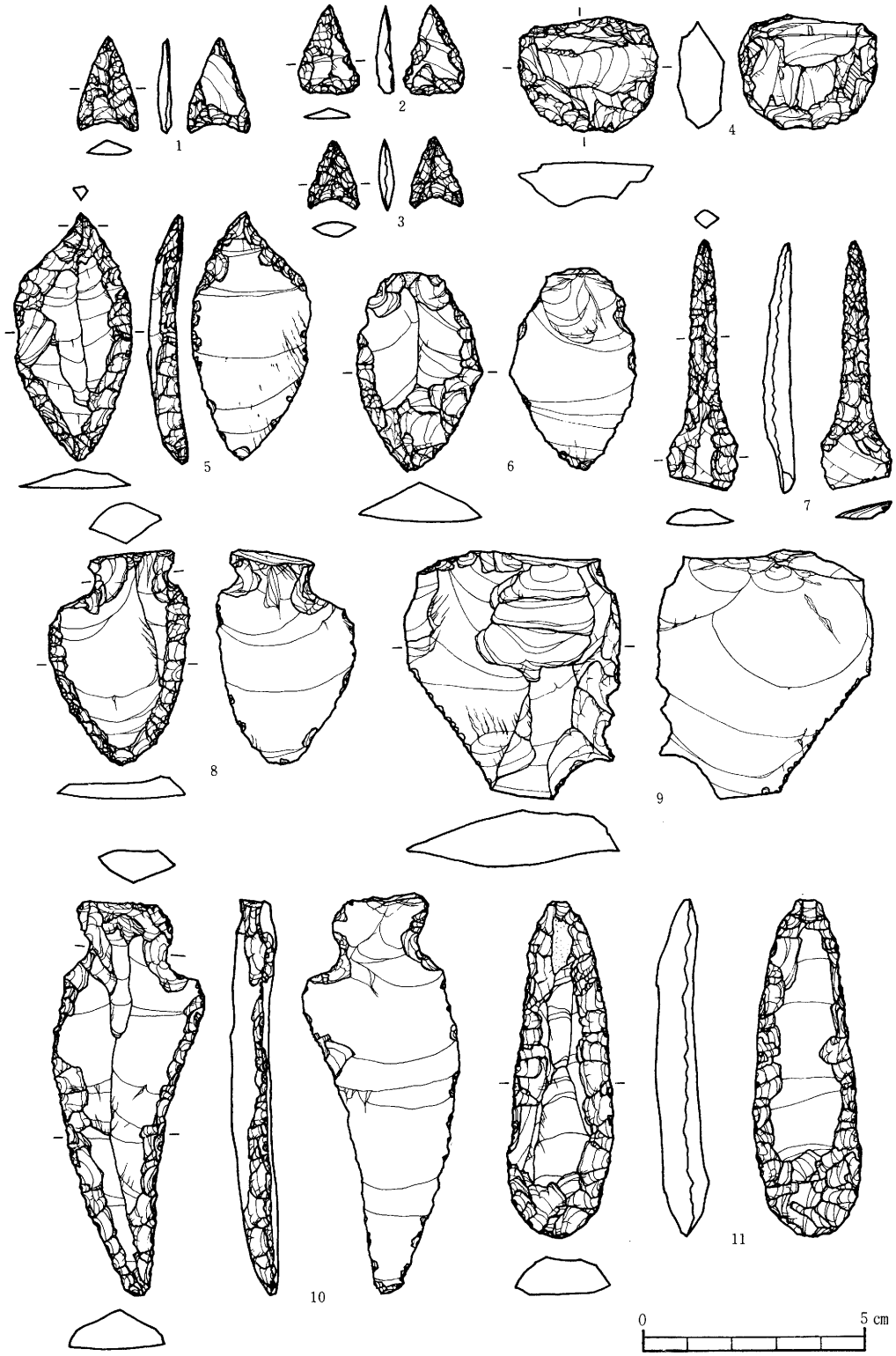
番号	遺　構	口　径	器　高	外面施文・調整	内面調整
1	29号土壙	24.0cm	28.5cm	刺突→縄文(RL)→沈線文(山形文、鋸歯文)	横位調整
2	6号住居炉	29.0cm (復元径)	――	沈線区画→調整(ミガキ)→撚紋(L)・刺突	横位調整

第7図　出　土　遺　物　(2)



1．5．7　7号住居跡床面　　4．7号住居跡6層
2．　　7号住居跡Pit2　　8．7号住居跡2層
3．6．9　7号住居跡5層　　10．5号住居跡床面

第8図　出土遺物(3)



第9図　出 土 遺 物 (4)

Ⅰ区Ⅰ－27グリッドで検出され、５号住居跡と重複している。直径42cmの円形の掘り方に底部を欠損する縄文土器（写真20の２）を埋めている。掘り方の深さは37cmである。

土　　壙

30基が検出され、確認面は第Ⅹ層と第Ⅻ層とがある。

第Ⅹ層……22号～24号・32号～36号・43号～46号土壙

第Ⅻ層……17号～21号・25号～28号・31号・37号～42号・47号・48号土壙

土壙の平面形には円形、楕円形、長方形、不整形のものがあり、断面形には長方形、U字形、舟底形のものがある。大きさ・深さも様々である。遺物は17号・25号・27号・37号土壙で出土しているのみである。

17号土壙

Ⅰ区Ｆ－26・27グリッドで検出され、５号住居跡の南に位置し、21号土壙と重複している。平面形は長軸1.2m、短軸0.9mの楕円形を呈する。深さは20cmで、断面形は舟底形を呈する。堆積土は５層あり、暗褐色・黒褐色シルト層が殆どである。堆積土及び底面より縄文土器片が出土している。

22号土壙

Ⅰ区Ｄ－20・21グリッドで検出され、平面形は長軸1.3m、短軸0.7mの長方形を呈する。深さは約１mで、断面形は長方形を呈する。堆積土は５層あり、褐色のシルト・砂質シルト・粘土質シルト層である。遺物は殆どない。

36号土壙

Ⅱ区Ｆ－５グリッドで検出され、平面形は直径1.1mの円形を呈する。深さは45cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は３層あり、褐色の粘土質シルト・砂質シルト層である。遺物は出土していない。

37号土壙

Ⅱ区Ｈ－２グリッドで検出され、平面形は長軸約70cm、短軸約50cmの楕円形を呈する。深さは約20cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は１層である。堆積土中より縄文土器片を出土している。

遺物包含層

基本層位第Ⅹ・Ⅺ層より縄文土器、石器等が出土している。第Ⅹ・Ⅺ層は調査区のほぼ全域に堆積しているが、Ⅰ区Ｂ～Ｆ－20グリッドを境として西側では多量の縄文土器、石器が出土するのに対し、東側では遺物は極めて少い。多量の遺物が出土した範囲は、縄文時代の竪穴住居跡が確認された地区と殆ど一致している。出土した土器は大部分が中期末葉（大木10式）から後期初頭のものであり、僅かに中期中葉（大木８ｂ式）のものもある。

(2) 出土遺物

○**縄文土器**（第６図、第７図１、第８図、写真19、写真20の１～12）

竪穴住居跡、埋設土器遺構、土壙、遺物包含層より多量の土器片が出土している。殆どが深鉢であるが注口土器、ミニチュア土器もある。深鉢には文様のあるものとないものがある。

図示したものは大部分７号住居跡出土のものであるが６号住居跡出土（第７図１）、５号住居跡出土（第８図10）のものもある。

現段階では、本格的な遺物整理作業を実施していないため不明な点も多いが、文様構成は玉抱連結「Ｓ」字状文様、玉抱連結変形「Ｓ」字状文様、「Ｕ」字状文様、「∫」字状文様、「Ａ」字状文様[註６]などがある。文様は体部上半に限定され、隆沈線、沈線で描かれており、無文帯によって生じた区画内には縄文・撚糸文が充填されている。体部下半は縄文・撚糸文のみである。玉抱連結のもの、「Ａ」字状のものは、連結部分、玉を抱いた末端部分、「Ａ」字状無文帯の頂部が鰭状の隆線となっている（第６図、写真19の１～３・６、写真20の３）。刺突文も多用され、口縁部に１～３列に連続刺突文が施されているものや無文帯によって生じた区画内に刺突文が充填されるもの（第６図２、第７図１、第８図10、写真19の３・４・６・７、写真20の３・6）がある。

このような文様をもつ土器は、梨木囲遺跡、菅生田遺跡の大木10式第Ⅱ Ｂ段階の土器群と類似性が見られることより、本遺跡出土のものも大木10式第Ⅱ Ｂ段階に位置づけられよう。

また、方形区画文のもの（写真20の２）は、隆線・沈線によって区画され、隆線には刻目が施される。無文帯の上部は鰭状の隆線となり、区画内にはＲＬ縄文が充填されている。これと類似するものは、沼津貝塚や六反田遺跡より出土しており[註７]、大木10式最終段階に位置づけられている。その他、大木８ｂ式、後期初頭の土器も出土している。

○**石器**（第９図、写真21）

石器は剥片石器、礫石器が各遺構より多量に出土しており、特に６・７号住居跡では剥片石器が多く出土している。図示したものは７号住居跡出土のものである。

Ｂ．弥生時代の遺物

Ⅰ区Ｃ－１、Ⅱ区Ａ－３グリッド第Ⅵ層で検出された第29号土壙の堆積土１層から弥生時代の甕（第７図１）が出土している。器形は体部がやや膨らみながら立ち上がり、上半ですぼみ、口縁部へかけて外反している。口唇部には頂部がややくぼんだ山形突起（推定５個）がある。口縁部は若干肥厚し、直下には交互刺突状文様（口縁部肥厚後沈線をめぐらし、工具で一定方向から刺突を施し交互刺突状にしたもの）がめぐる。沈線による鋸歯状文で区画された体部上半の文様帯には、２段の２本沈線の山形文が施文される。これらの文様の特徴から、この土器は弥生時代後期の天王山式に比定される。尚、土壙が同時期であるかどうかは不明である。

C．古墳～平安時代の遺構と遺物

竪穴住居跡

８号住居跡

〔遺構の確認〕　Ⅱ区G～Ⅰ－０・１グリッドの第Ⅴ層（黒褐色シルト）上面で確認され、北東隅は調査区外に延びている。

〔重複、増改築〕　確認されなかった。

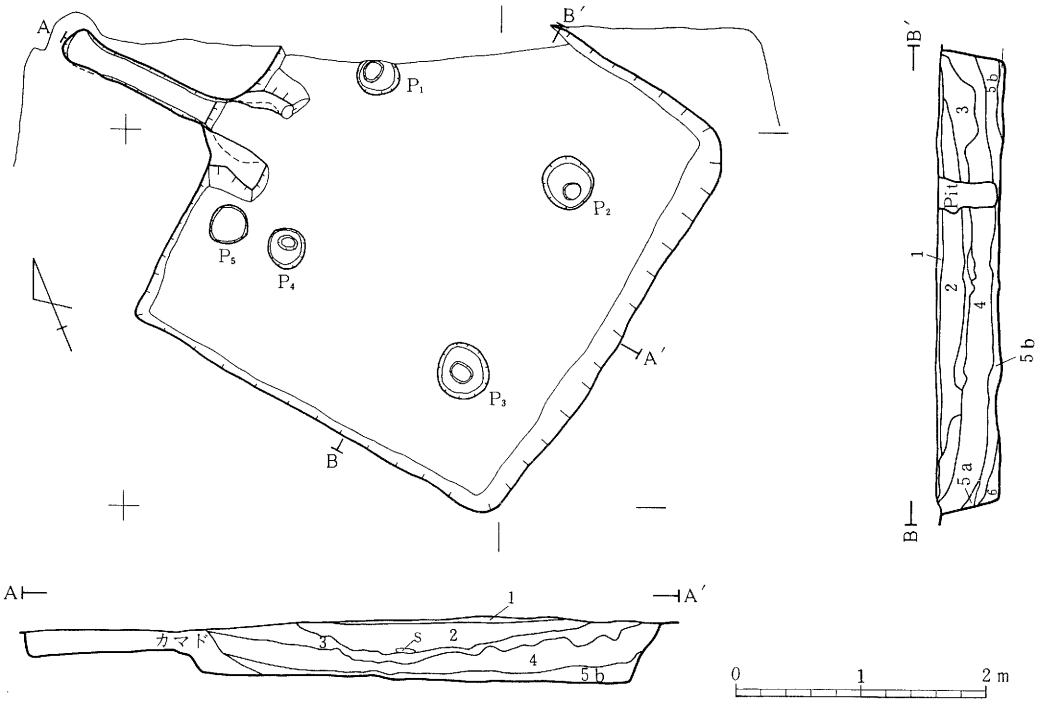
〔平面形・規模〕　平面形は東西3.7m、南北3.5mの方形を呈する。主軸方向はN－40°－Wである。

〔堆積土〕　６層に大別される。

１層（褐色シルト層）　最上層である。薄く堆積している。

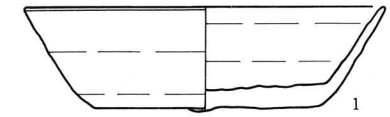
２層（にぶい黄褐色シルト層）　住居跡の壁際を除いて堆積している層で、中央部が厚い。

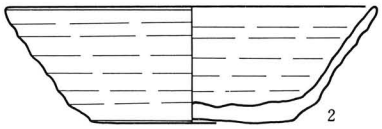
３層（褐色シルト層）　住居跡のほぼ全体に堆積している層で、壁に近づくにつれて厚くな

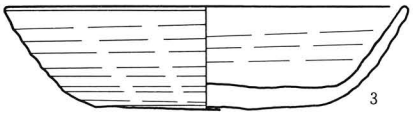


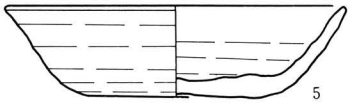
層位	土　　色	土　性	備　　考
1	10YR4/4褐色	シルト	マンガン粒を含む
2	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒を含む
3	10YR4/4褐色	シルト	炭化物、マンガン粒、砂を含む
4	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物を含む
5 a	10YR3/3暗褐色	シルト	炭化物、酸化鉄を多量、マンガン粒を少量含む
5 b	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	炭化物、酸化鉄、砂を含む
6	7.5YR3/3暗褐色	シルト	酸化鉄、マンガン粒、砂、少量の炭化物を含む

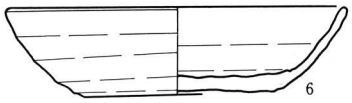
第10図　８号住居跡実測図

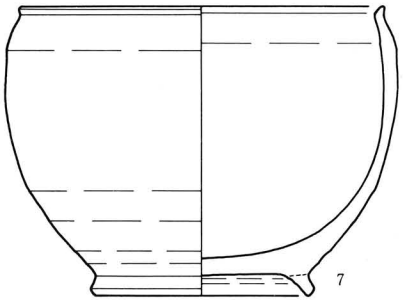


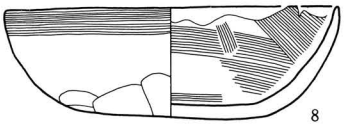


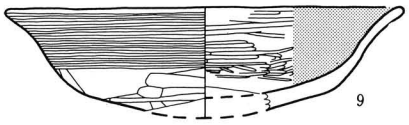


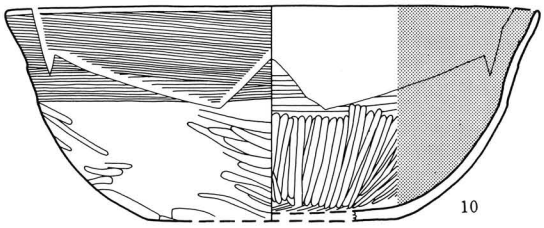


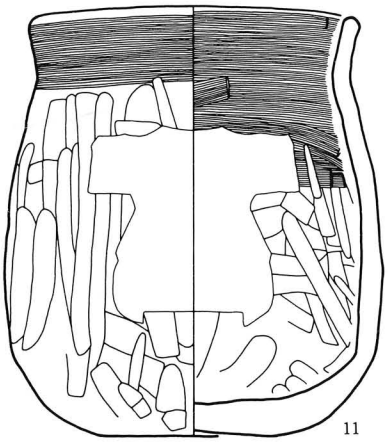


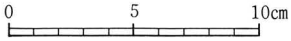












番号	遺構	種類	器種	特徴	
				外面	内面
1	9号住4層	須恵器	坏	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ
2	9号住床直	須恵器	坏	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ
3	9号住床面	須恵器	坏	ロクロナデ,底部回転糸切り後,手持ちヘラケズリ	ロクロナデ
4	50号土壙2層	須恵器	坏	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ
5	50号土壙2層	須恵器	坏	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ
6	50号土壙2層	須恵器	坏	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ
7	50号土壙2層	須恵器	鉢	ロクロナデ、底部ヘラ切り後高台はり付け、「十」印線刻あり	ロクロナデ
8	3号住床直	土師器	坏	口縁部ヨコナデ、体部下端底部ヘラケズリ	ヨコナデ
9	8号住カマド・煙道	土師器	坏	口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理
10	8号住床面	土師器	坏	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ヘラミガキ底部、ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理
11	8号住床面	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ	口縁部ヘラナデ、体部ナデ

第11図　出土遺物(5)

っている。

4層（にぶい黄褐色粘土質シルト層）　住居跡の全体に厚く堆積している。

5層（暗褐色粘土質シルト層）　住居跡の床面をほとんど覆っている層で、壁に近づくにつれて徐々に厚くなる。多量の炭化物が混じる。

6層（暗褐色シルト層）　住居跡の壁際及び床面に部分的に堆積している。

〔壁〕　第Ⅴ～Ⅸ層を壁としており、壁高は約50cmである。床面よりほぼ垂直に立ち上がる。壁の検出は壁際に薄い炭化物層が存在したため、比較的容易であった。

〔床面〕　第Ⅸ層の黄褐色砂質シルトを床面としている。貼り床ではない。床面はほぼ平坦であるが住居の中央部付近は僅かに高くなっている。カマド周辺・柱穴から中心部にかけては非常に堅いが壁際は柔らかである。

〔柱穴〕　床面上より5個のピットが検出されている。そのうち柱穴はP_1～P_4である。掘り方は30～45cmの円形を呈し、柱痕跡は直径約15cmである。

〔周溝〕　検出されなかった。

〔カマド〕　北壁中央部に付設され、燃焼部と煙道部からなる。規模は長さ1.95m（燃焼部65cm、煙道部1.3m）、幅1.05mである。カマドの構築方法は、壁を掘り込んで奥壁とし、にぶい黄褐色、褐色、明黄褐色シルトを積み上げて袖としている。袖の大きさは、左袖（長さ×幅×最大高）50×40×38cm、右袖（同）40×30×25cmである。煙道部は奥壁より北側にのび、深さ20cmで、底面は殆んど水平で、煙り出し部で垂直に上がっている。底面及び両袖内側は火熱を受けて焼けている。

〔遺物の出土状況〕　カマド・床面より土師器坏・甕が出土している（第11図9～11）。

竪穴遺構

6号竪穴遺構1基がある。Ⅱ区H・Ⅰ－6・7グリッドで検出され、21号溝と重複している。平面形は東西3.4m、南北3.4mの隅丸方形を呈する。堆積土は、4層あり、各層とも多かれ少なかれ炭化物、鉄滓が混入している。底面はほぼ平坦である。ピットは底面上で2個検出され、ピット底面は共に焼けて堅くなっている。出土遺物には羽口、土製紡錘車、鉄滓がある。

掘立柱建物跡

2号建物跡

Ⅰ区A～D－11～13グリッドで検出され、桁行4間以上（柱間寸法は1.8m等間）、梁行2間（柱間寸法は西より2.3＋2.4m）の南北棟建物で、主軸方向はN－19°－Eである。柱穴は一辺約50～130cmの隅丸方形、隅丸長方形の掘り方で柱痕跡は直径約20cmである。

3号建物跡

Ⅱ区A・B－6・7グリッドで検出され、東西2間（柱間寸法は西より1.8＋1.5m）、南北

2間（柱間寸法は1.8m等間）の方形の建物で、主軸方向はN－30°－Eである。柱穴は一辺50～70cmの方形、長方形の掘り方で柱痕跡は直径約20cmである。3号住居跡、51・52号土壙、7号溝に切られている。

4号建物跡

Ⅱ区A・B－8～10グリッドで検出され、桁行3間（柱間寸法は150～160cm）、梁行2間（柱間寸法は西より150＋180cm）の南北棟建物で、主軸方向はN－30°－Eである。柱穴は一辺40～55cmの方形の掘り方で柱痕跡は直径15～20cmである。

5号建物跡　Ⅱ区I～K－2・3グリッドで検出され、桁行2間以上（柱間寸法は180cm等間）、梁行2間（柱間寸法は西より210＋220cm）の南北棟建物で、主軸方向はN－19°－Eである。柱穴は一辺50～250cmの長方形、方形の掘り方で柱痕跡は直径15～20cmである。掘り方は重複しており、同一場所に建て替えている。

土　　壙

50号土壙

Ⅰ区D－7グリッドで検出され、長軸3m以上、短軸2.3mの楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さは55cmである。堆積土は4層あり、各層及び底面より土師器坏・甕、須恵器坏・鉢（第11図4～7）、円面硯、鉄製品が出土している。

51号土壙

Ⅱ区B－6・7グリッドで検出され、長軸90cm、短軸80cmのほぼ円形を呈する。断面形はU字形を呈し、深さは約30cmである。堆積土は6層あり、各層に炭化物・焼土が多量に混じっている。堆積土より須恵器坏が出土している。

溝　　跡

5条があり、7・11号溝は第Ⅴ層上面、12～14号溝は第Ⅵ層上面で検出された。7号溝は幅80～100cmで南北に走る溝でⅡ区A・B－6グリッドで途切れている。断面形はU字形で深さ20～24cmである。11号溝は幅40cmで東西に走る溝で、断面形はU字形、深さ20～26cmである。13号・14号溝は共に基本層位第Ⅴ層黒褐色シルトが堆積している。13号溝は12号溝と重複しており、13号溝が新しい溝で、12号溝と接した部分以北は12号溝の真上を走る。14号溝は3号住居跡、4号掘立柱建物跡に切られている。

小溝状遺構

調査区のほぼ全域に検出され、幅20～30cm、深さ5～8cmのものが大部分である。方向は北西―南東に走るものと東西に走るものと南北に走るものがある。堆積土も暗褐色・褐色・黒褐色シルトがある。

その他、ピットが多数検出されている。

3．まとめ

今回の発掘調査の成果をまとめると次のとおりである。

1．名取川によって形成された自然堤防上に立地する重層構造の遺跡で、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代の遺構、遺物が検出された。

2．縄文時代の遺構は、竪穴住居跡、埋設土器遺構、土壙、ピット、遺物包含層が検出され、縄文土器、石器等が出土している。

a．竪穴住居跡は3軒検出され、遺物より大木10式期に属するものである。炉はいずれも複式炉であり、6号・7号住居跡の床面には部分的に河原石を敷きならべている。

b．埋設土器遺構は2基あり、確認面が第Ⅹ、Ⅻ層であることから、時間差があると考えられる。

c．土壙は30基あり、確認面が第Ⅹ、Ⅻ層であることから時間差があると考えられる。

d．遺物包含層は第Ⅹ・Ⅺ層の2枚で、縄文時代中期中葉(大木8b式)、中期末葉（大木10式）から後期初頭の遺物が出土している。

e．各遺構・包含層出土の遺物は中期末葉（大木10式）から後期初頭が殆どである。

3．弥生時代遺物としては後期の天王山式期の甕が2基の土壙より出土している。しかし、その最上層出土であるため、土壙の時期は断定できない。

4．古墳～平安時代の遺構は、竪穴住居跡、竪穴遺構、掘立柱建物跡、土壙等が検出され、土師器、須恵器、鉄製品等が出土している。

a．竪穴住居跡は4軒検出され、遺物より栗囲式期、国分寺下層式期、表杉ノ入式期に属するものである。

b．竪穴遺構は1基検出され、鉄滓、羽口等が多く出土している。

c．掘立柱建物跡は4棟検出されている。

d．土壙は3基検出されている。そのうち1基は遺物より国分寺下層式期のものである。

e．その他、溝跡、ピット、小溝状遺構が検出されている。

写真１　縄文時代の遺構
全景（23～30列）
（西→東）

写真２　７号住居跡
（１号炉）全景
（北→南）

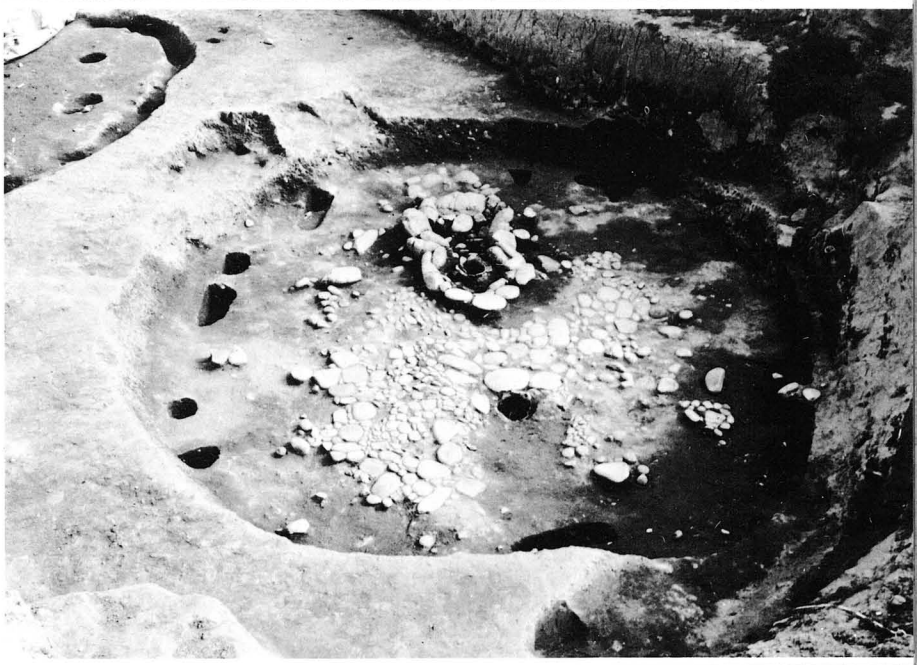


写真３　７号住居跡
（２号炉）全景
（北→南）

写真４　７号住居跡２号炉
（南→北）

写真５　５号住居跡全景
（南→北）

写真６　５号住居跡
遺物出土状況
（北→南）

写真７　１号埋設土器遺構
(西→東)

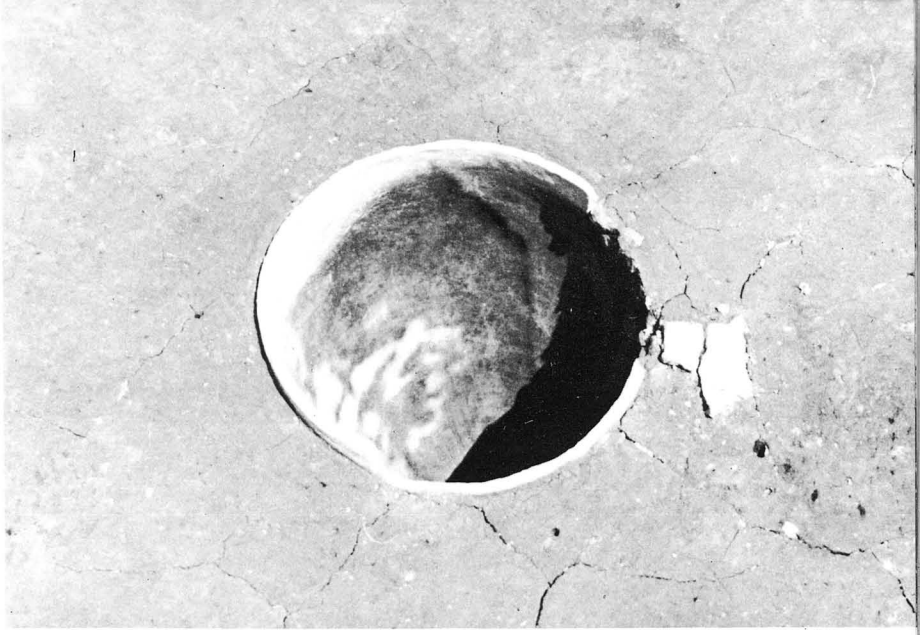


写真８　２号埋設土器遺構
断面
(南→北)

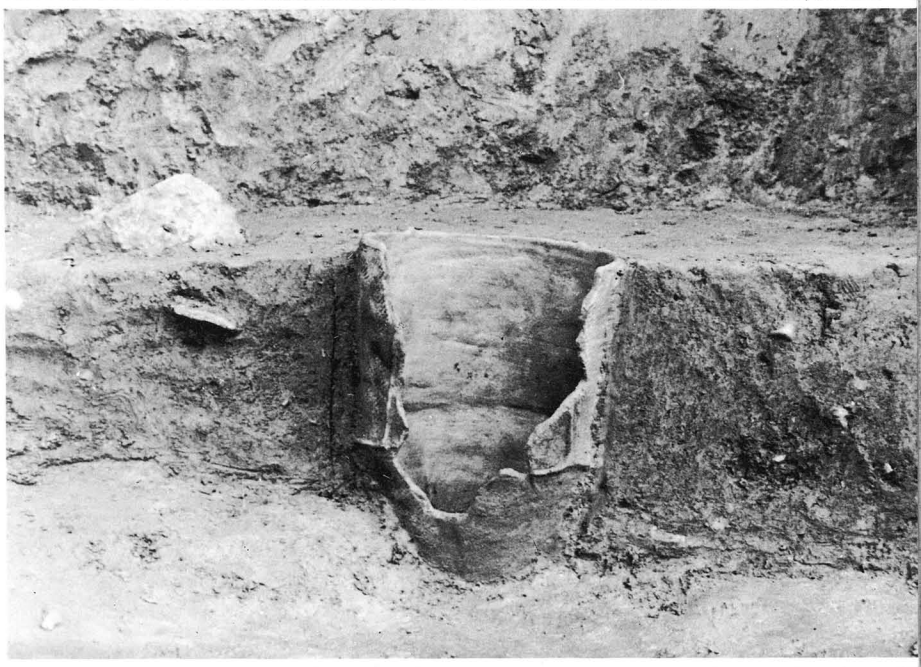


写真９　古墳～平安時代の
遺構全景
(西→東)

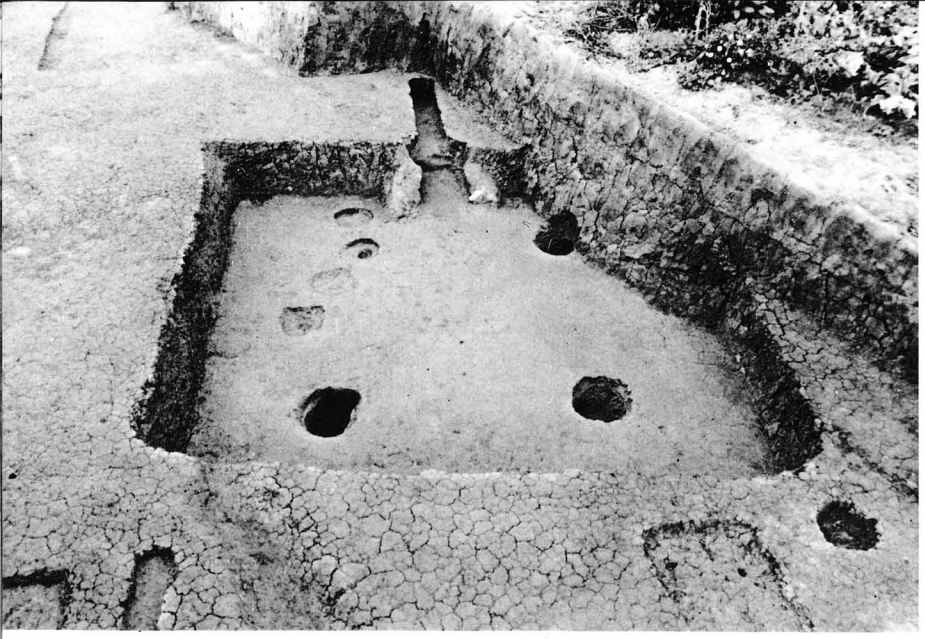


写真10　８号住居跡全量
(南→北)

写真11　９号住居跡全景
(西→東)

写真12　９号住居跡カマド
全景
(西→東)

写真13　10号住居跡全景
（西→東）

写真14　６号竪穴遺構全景
（東→西）

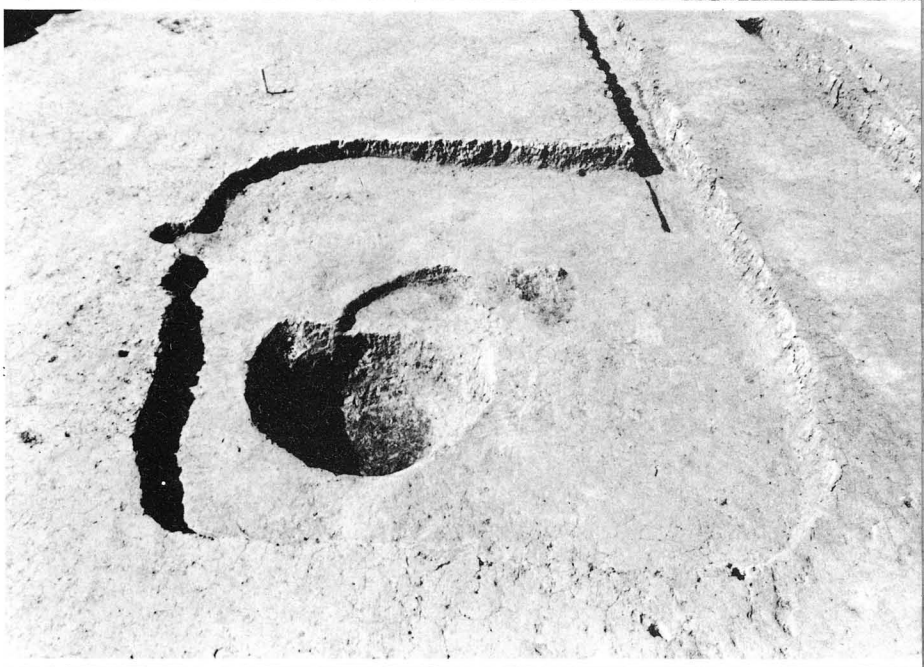


写真15　51号土壙全景
（西→東）

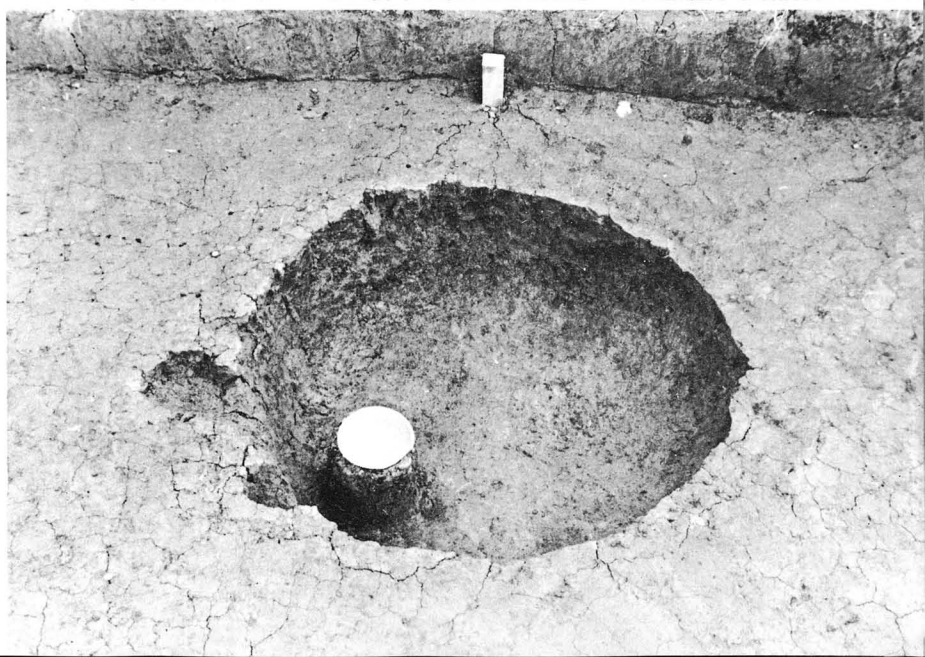
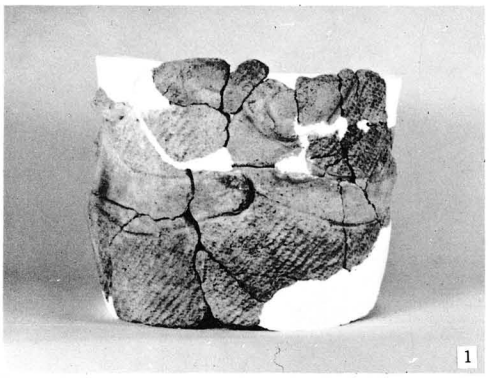


写真16　２号掘立柱建物跡
全景
(北→南)

写真17　３号・４号掘立柱
建物跡全景
(南→北)

写真18　５号掘立柱建物跡
全景
(北→南)

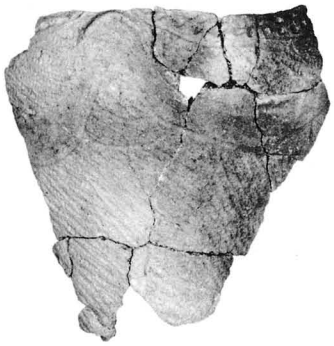

1

2

3

4

5


6

7

1．7号住居跡2号炉1号埋設土器（第6図1）

2．7号住居跡2号炉2号埋設土器

3．7号住居跡1号埋設土器（第6図2）

4．7号住居跡2号埋設土器

5．7号住居跡1号炉埋設土器

6．7号住居跡5層出土

7．6号住居跡炉（第7図2）

写真19　出土遺物(1)

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

1．1号埋設土器遺構　2．2号埋設土器遺構　3．7号住居跡
4．7号住居跡　5．7号住居跡(第8図5)　6．5号住居跡(第8図10)
7．7号住居跡(第8図6)　8．7号住居跡(第8図8)　9．7号住居跡(第8図7)
10．7号住居跡(第8図9)　11．7号住居跡(第8図4)　12．5号住居跡
13.29号土壙(第7図1)

写真20　出土遺物(2)

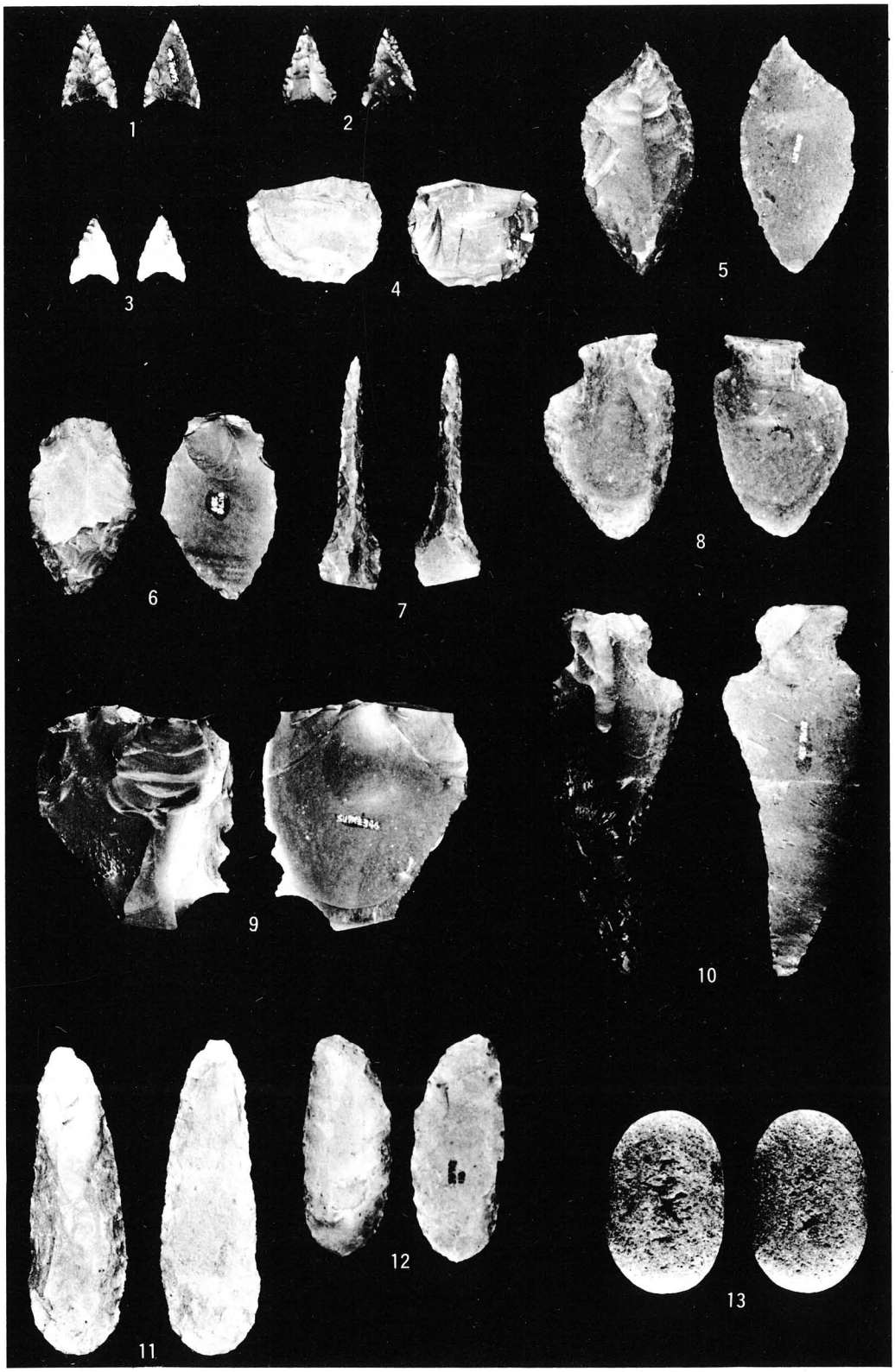
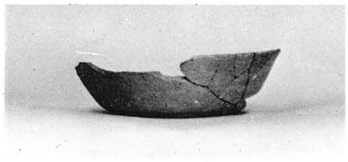
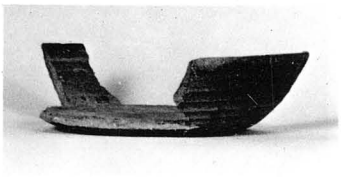


写真21　出 土 遺 物 (3)　　Scale; 1 ～12ー約2/3　13ー約1/4

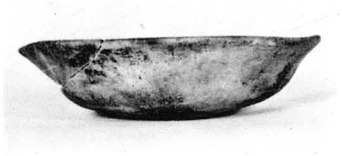

1

2


3

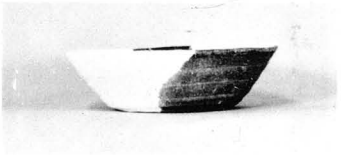
4

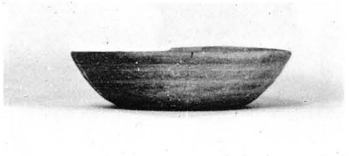
5


6

7

8


9


10

11

12

13

14

1．9号住居跡(第11図1)　2．9号住居跡(第11図2)　3．9号住居跡(第11図3)
4．10号住居跡　5．3号住居跡(第11図8)　6．8号住居跡(第11図9)
7．8号住居跡(第11図10)　8．51号土壙　9．50号土壙(第11図4)
10．50号土壙(第11図5)　11．50号土壙(第11図6)　12．50号土壙
13．50号土壙(第11図7)　14．50号土壙

写真22　出 土 遺 物 (4)

Ⅳ．泉崎前遺跡

１．遺跡の立地

泉崎前遺跡は、東北本線長町駅の南西約1.5kmに位置し、名取川と広瀬川とにより形成された後背湿地に立地する。付近は土地区画整理事業により盛土され宅地化が進行しているが、以前は水田として土地利用されていた。旧水田の標高は10.5m 前後である。

２．調査の方法

泉崎東工区北半部分（七北田起点から13.059～13.370km）の試掘調査の結果、13.335km地点で畦畔が確認されたため、13.314～13.355kmを本調査に移行した。11×51m の調査区Ⅰ区(註8)を設定し、南北に4 ～50、東西にＡ～Ｃの６×６ｍ グリッドを組み調査を実施した。

３．調査の概要

基本層位　層位は33層確認された(第12図７、写真25)。１層は旧水田の耕作土である。２・３層はシルト層、４～23層は黒褐色・褐灰色系統の粘性の強いシルトないし粘土層であり、未分解の植物遺体を多量に含有する。24層以下は青灰色系統の粘土および砂層となり、33層が沖積層の基底礫層(註9)である。

試掘　４層で畦畔状の盛り上がりが検出され、Ｌ状に直交することや、水口状の凹部が確認されたことから水田跡と判明した。時期は、３・４層に土師器・須恵器が包含されることや５層上面に灰白色火山灰(註10)がのることから平安時代と捉えられる。一方、プラント・オパール分析(註11)からも４層、11層に水田跡の存在が予想された。

遺構と遺物　試掘の結果や近隣する山口遺跡の成果(註12)から、この後背湿地に古代の水田跡の存在が予想されたため本調査を実施した。その結果、平安時代の２時期の水田跡２面(Ⅰ・Ⅱ)、11層で畦畔状遺構１条、溝状遺構内の杭列を検出した。

水田跡Ⅰは４層で検出された(第12図１、写真23)。標高は10m 前後である。細長い調査区のため水田１枚を完全な形で検出することはできず、水田１枚の面積・形状等の詳細は不明である。しかし、比較的良い状態で検出された水田が４枚存在する(水田①～④)。付属施設として水口を３カ所検出したが、水路等の施設は確認されなかった。水田①～④の高低は②＝④→③→①の順で低くなる。畦畔の幅は上幅で30～60cmであるが、一部では１ｍを測る。畦畔の方向は、水田①・②の南辺の畦畔が東西に走行し、他は北東ないし北西方向である。水田跡Ⅰに伴う遺物は出土していない。

水田跡Ⅱは５層で検出された(第12図２、写真24)。標高は9.9m 前後である。5層上面には平安時代に降下した灰白色火山灰がのっており、畦畔遺構検出の手掛りとなった。水田跡Ⅰ同様完全な形の水田は１枚も検出されていないので、面積・形状は不明である。畦畔の位置は水田

跡Ⅰとほぼ同位置である。比較的良い状態で確認された水田が4枚ある(水田⑤～⑧)。付属施設として水口を2カ所検出した。水田の高低は⑥と⑧がほぼ同レベルで高く、⑤と⑦が同レベルで低くなっている。畦畔の上幅は40～60cmである。方向は水田⑤・⑥の南辺と⑧の北辺の畦畔が東西方向であり、他は北東ないし北西の方向である。遺物は水田⑤の作土上面ならびに作土中から赤焼土器坏片が数点出土している。

プラント・オパール分析により11層に水田の存在が予想された。しかし、B－50グリッドの西側で畦畔状の遺構が1条確認されただけである(写真26)。その上幅は1m、下幅1.3m、長さは約3.6m、高さ約5cmを測る。方向は北東―南西である。

杭列は調査区北端の12層上面で確認された溝状遺構(註13)の堆積土上層中から検出された（第12図6、写真27)。長さ約2～2.5mの杭2本が幅60～70cmの間隔で横たわり、そのなかにほぼ東西方向に10数本の杭が並ぶ。杭は30～70cmの間隔であり、上端部はほぼ標高9.6m、下端部が標高9mである。杭の長さは50～85cmで下端部は加工されている。上端部が南へ傾くものが多いが北や東へ傾くものもある。何らかの施設と考えられるが、畦畔や水路等の施設が伴わないのでその性格は不明である。

杭列検出と同一面より有孔の木製品（写真37－1）が出土している。完形ではないが農耕具と考えられる。他に12層上面から丸木弓(写真37－2)、各層から種子類が出土している。

4．まとめ

平安時代の水田跡が2面確認されたが水田経営の具体的内容は不明な点が多い。また、11層での水田の有無、時期の問題なども残された課題である。さらに、今後条里制や周辺に存在が予想される集落跡との関連も大きな課題となろう。

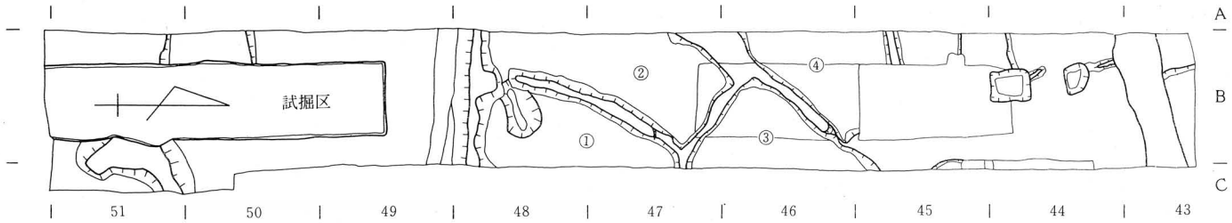
Ⅴ．泉崎浦遺跡

1．遺跡の立地

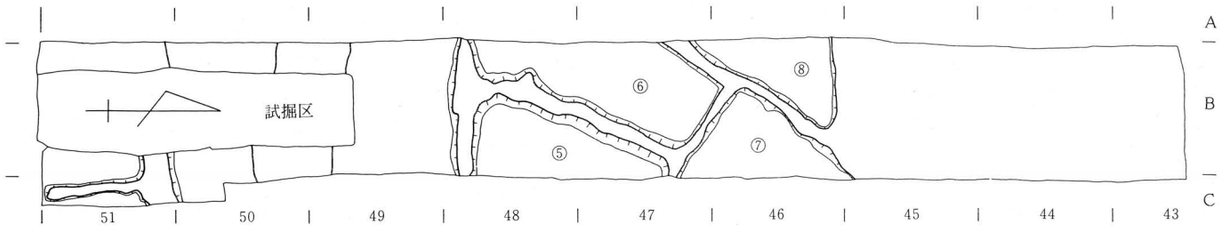
泉崎浦遺跡は長町駅の南西約1.5kmに位置し、広瀬川と名取川とにより形成された後背湿地と、その中にある微高地に立地する。微高地は小規模な扇状地の末端部で標高は11.3mであり、盛土以前は畑地として土地利用されていた。周辺の後背湿地も盛土以前は水田として土地利用されており、標高は10.8m前後である。

2．調査の方法

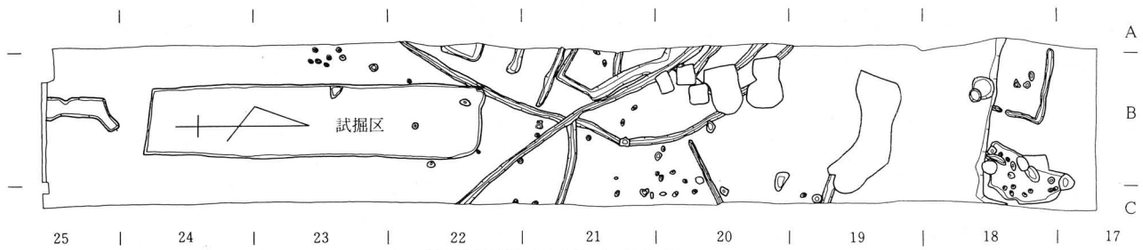
泉崎東工区北半部の試掘調査の結果、微高地で住居跡、遺物包含層、北側の後背湿地で畦畔状遺構が確認されたため、13.079km～13.120kmに本調査区Ⅲ区(註14)、13.158～13.208kmに本調査区Ⅱ区を設定した。Ⅱ区は11×50mの調査区で、南北に17～25、東西にA～Cの6×6mのグリ



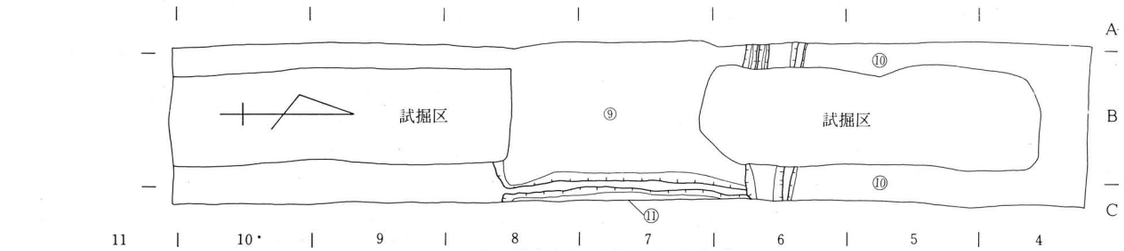
1．泉崎前遺跡全体図（4層上面）



2．泉崎前遺跡全体図（4層上面）

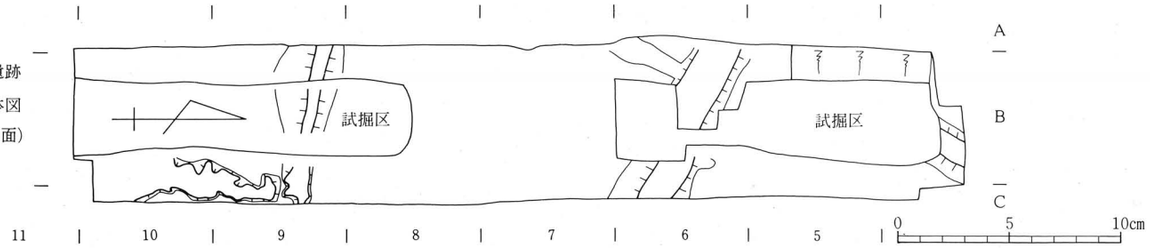


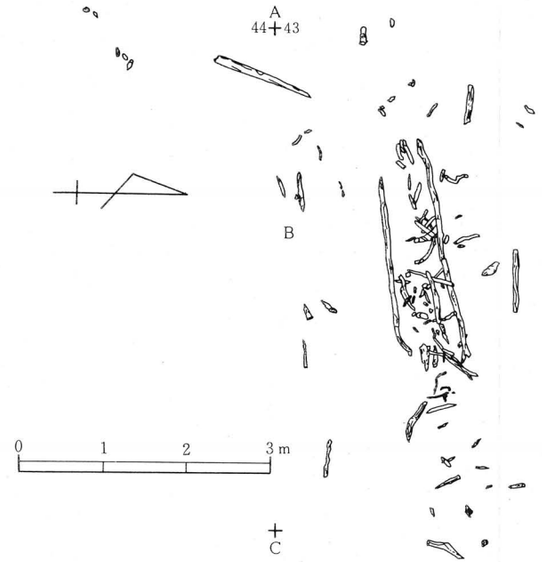
3．泉崎浦遺跡Ⅱ区全体図（5層上面）



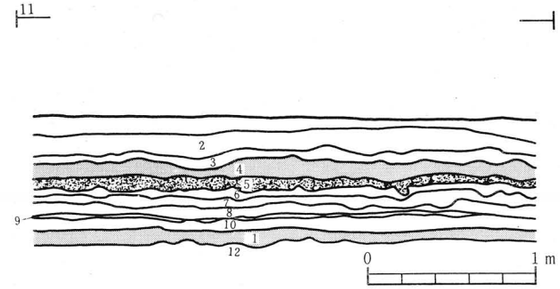
4．泉崎浦遺跡Ⅲ区全体図（5層上面）

5．泉崎浦遺跡
Ⅲ区全体図
（15層上面）



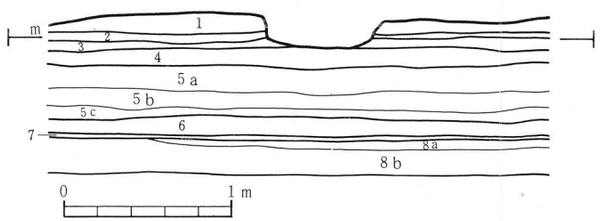


6．泉崎前遺跡杭列平面図



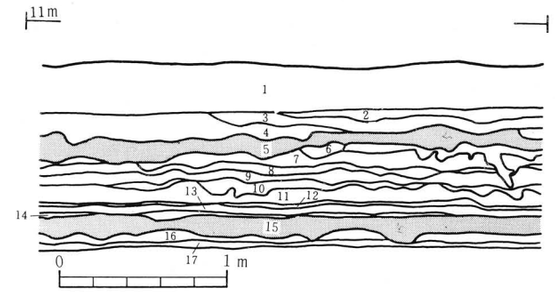
7．泉崎前遺跡断面図

層位	土　色	土　性	備　考
1	10ＹＲ4/4褐 灰 色	砂質シルト	旧水田耕作土
2 a	10ＹＲ5/6明黄褐色	砂質シルト	
2 b	10ＹＲ3/4褐 灰 色	破質シルト	
3	10ＹＲ1/2黒　色	シルト	遺物を含む
4	10ＹＲ4/4褐 灰 色	粘土質シルト	水田跡Ⅰ
5	10ＹＲ3/4黒 褐 色	粘土質シルト	水田跡Ⅱ。未分解植物遺体を含む。灰白色火山灰をのせる。
6	10ＹＲ5/6灰黄褐色	シルト質粘土	
7	10ＹＲ3/2黒 褐 色	シルト質粘土	未分解植物遺体を含む
8	10ＹＲ5/6灰黄褐色	シルト質粘土	10ＹＲ3/1黒色シルト質粘土と縞状になる。
9	10ＹＲ4/4褐 灰 色	粘　土	未分解植物遺体を含む
10	10ＹＲ1/2黒　色	粘土質シルト	未分解植物遺体を含む
11	10ＹＲ3/2黒 褐 色	粘　土	未分解植物遺体を含む
12	10ＹＲ3/2黒 褐 色	粘　土	未分解植物遺体を含む



8．泉崎浦遺跡Ⅱ区断面図

層位	土　色	土　性	備　考
1	10ＹＲ5/6.5オリーブ褐色	シルト	旧水田耕作土
2	2.5Ｙ5/6明黄褐色	シルト	旧水田耕作土床土
3	10ＹＲ5/6にぶい黄褐色	シルト	
4	10ＹＲ3/2黒褐色	シルト	遺物包含層
5 a	2.5Ｙ0.5/5.5浅黄色	シルト質砂	
5 b	2.5Ｙ4/3オリーブ褐色	シルト質粘土	2.5Ｙ3/1黒褐色粘土と互層になる
5 c	2.5Ｙ4/3オリーブ褐色	シルト質粘土	2.5Ｙ3/1黒褐色粘土の密度が濃くなる
6	10ＹＲ5/6灰黄褐色	砂	
7	2.5Ｙ3/1黒　色	シルト質粘土	
8 a	2.5Ｙ3/1黒褐色	シルト質粘土	
8 b	2.5Ｙ3/1黄灰色	粘　土	



9．泉崎浦遺跡Ⅲ区断面図

層位	土　色	土　性	備　考
1 a	10ＹＲ5/2灰黄褐色	シルト	旧水田耕作土
1 b	10ＹＲ4/4褐　色	シルト	旧水田耕作土床土
2 a	10ＹＲ3/1黒褐色	砂質シルト	
2 b	10ＹＲ3/2黒褐色	シルト	
3	10ＹＲ4/4にぶい黄褐色	細　砂	
4 a	2.5Ｙ5/3にぶい黄褐色	細　砂	
4 b	2.5Ｙ3/1黄灰色	砂質シルト	
4 c	10ＹＲ5/6にぶい黄橙色	粗　砂	足跡の理土
5	5Ｙ3/1オリーブ黒色	粘　土	未分解植物遺体を含む
6	10ＹＲ5/6にぶい黄褐色	粘　土	炭化した植物遺体を含む
7	2.5Ｙ3/1黒　色	粘　土	未分解植物遺体を含む
8	10ＹＲ5/4にぶい黄褐色	粗　砂	
9	10ＹＲ4/2灰黄褐色シルト、10ＹＲ5/6にぶい黄橙色微砂、10ＹＲ1/2黒色腐植土が各々0.3～2cmで互層をなす。		
10	10ＹＲ5/4にぶい黄橙色	粗　砂	
11	5Ｙ4/2灰オリーブ色	シルト	5Ｙ3/1黒色シルトと互層になる
12	10ＹＲ1/2黒　色	粘　土	未分解植物遺体を含む
13	5Ｙ3/1灰色	粘　土	未分解植物遺体を含む
14	10ＹＲ1/2黒　色	粘　土	未分解植物遺体を含む
15	5Ｙ3/1オリーブ黒色	粘　土	未分解植物遺体、岩片を含む
16 a	10ＹＲ5/2灰黄褐色	粘　土	未分解植物遺体、岩片を含む
16 b	2.5Ｙ3/1黒　色	粘　土	未分解植物遺体を含む
16 c	7.5Ｙ3/1黒褐色	粘　土	未分解植物遺体を含む
17	2.5Ｙ5/3暗灰黄色	粘　土	未分解植物遺体を含む
18	2.5Ｙ3/1黒　色	粘　土	未分解植物遺体を含む

第12図　泉崎前遺跡全体図(1、2)断面図(7)杭列平面図(6)、泉崎浦遺跡Ⅱ区全体図(3)断面図(8)、Ⅲ区全体図（4、5）断面図(9)

ッドを組んだ。Ⅲ区は11×41m で南北に４～11、東西にＡ～Ｃの６×６ｍのグリッドを組んだ。なお、Ⅱ区は微高地、Ⅲ区は後背湿地に位置する。

３．調査の概要

Ⅱ区とⅢ区では立地が異なり、基本層位の対応が困難であったため、概要については別個に述べる。

(1)Ⅱ区の概要

基本層位　基本層位は１～８層まで確認されたが、基底礫層までは確認していない（第12図８）。１・２層は旧水田耕作土層である。４～６層がシルトないし砂層、７・８層が粘土層となる。

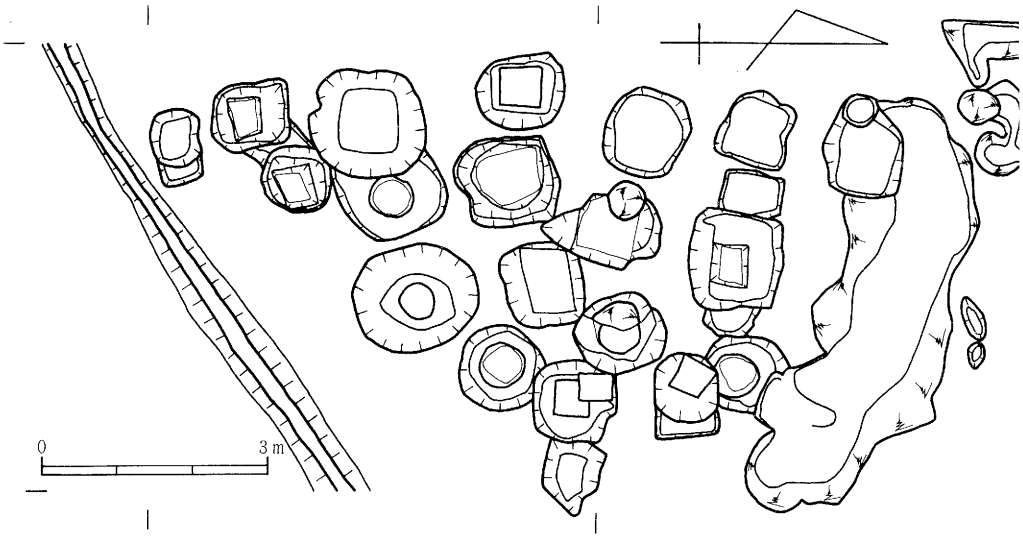
試掘　微高地から後背湿地に変換する部分に２カ所設定した。微高地から古墳時代の住居跡のプラン、変換部分に遺物包含層が確認されたため、本調査へ移行した。

遺構と遺物　江戸時代後期の墓壙群、古墳時代の住居跡、溝状遺構、ピット、遺物包含層が確認されている(第12図３)。

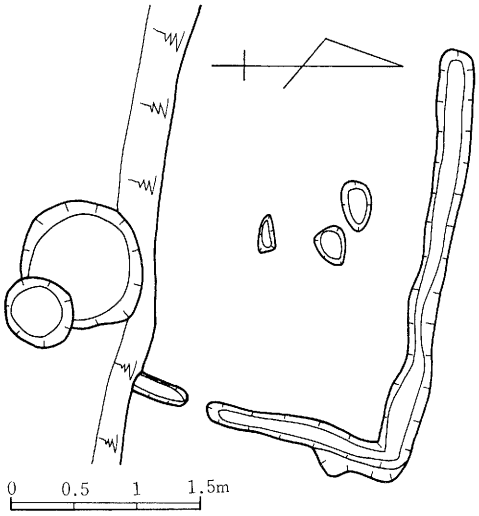
〈江戸時代〉　墓壙群は３層上面で27基検出された(第13図１)。標高は約10.7m である。北東―南西方向に走る当時の畦畔に区画された一画に密集している。木棺、木棺片、桶等が残存するものは７基である。木棺は一辺が50～60cmの正方形、深さ30～50cmである。桶は径45～50cm、深さ40cm程である。掘り方のプランは円形ないし方形で、径は１～1.5m 、深さ約80cmである。７号墓壙（写真29）では人骨が良好に遺存していた。被埋葬者は40才以上の頑強な男性である。(註15)
４号墓壙（写真30）では箸１膳をのせた茶碗と提燈２箇が出土した。他の副葬品（写真37―３～８）として陶磁器、提燈、箸、鳥形木製品、煙管、柄鏡、櫛、寛永通宝などがある。

〈古墳時代〉　１号住居跡（第13図２、写真31）は５層上面で検出された。標高は11m 前後であり、耕作土直下で確認された。西側と南側が後世の攪乱により破壊されており、南北2.3m 、東西3.5m 残存しているのみで規模は不明だが、平面形は方形と考えられる。検出面から床面までの深さは５cm程度で、北側に壁が一部残存している程度である。壁際に幅20cm、深さ５cmの周溝が南北2.3m 、東西3.5m 確認された。床面から土師器坏・甑（第13図３、５、写真37―10、11）・甕・蓋（第13図４、写真37―９）等が出土している。坏は丸底で、体部から口縁部へ丸味を帯びて立ち上がり、口縁部は内弯する。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部はヘラケズリである。内面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラミガキである。甑は最大径が口縁部にあり、体部はやや膨らみをもち口頸部は外反する。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部上半がナデ、下半がヘラケズリとナデである。内面は孔がヘラケズリ、他はヘラミガキである。蓋は天井部から口縁部へ直線的に開き、口縁部がやや内傾し、短い円筒状のつまみがつく。器面調整は外面がナデ、内面がヘラミガキである。(註16)

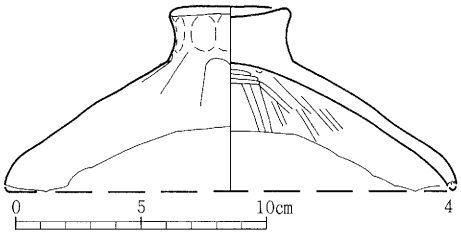
住居跡の南に隣接してピット４・５が検出された。ピット４がピット５を切っている。確認面は最近の耕作のため住居跡確認面より15cm程低く、住居跡に伴う遺構であるかどうかは不明である。

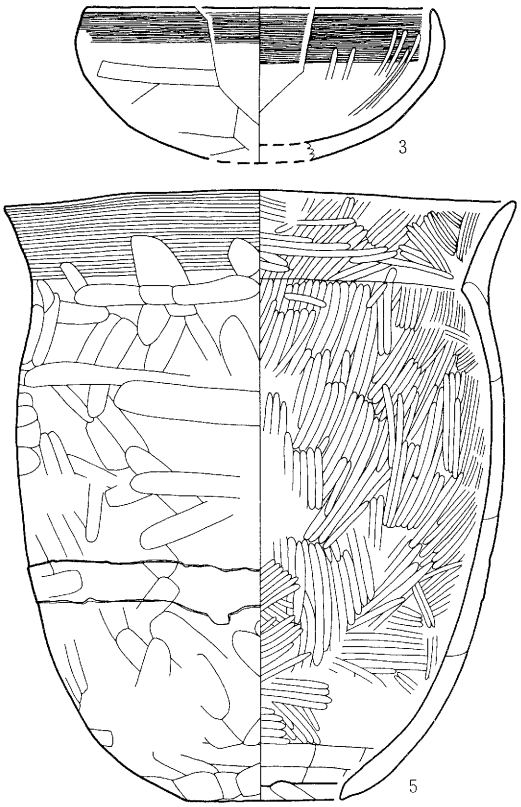


１．墓壙群平面図



２．１号住居跡平面図　３～５．出土土器





第13図　泉崎浦遺跡墓壙群平面図、１号住居跡平面図・出土遺物

溝状遺構は４層下部から５層上面で９条検出されている。規則性は看取できず、性格は不明である。

４層は遺物包含層でＢ－19グリッドより南に分布している。標高は10.4～10.7m で南へ緩く傾斜している。Ｂ－21・22グリッドに遺物の集中がみられる。

(2) Ⅲ区の概要

基本層位　層位は１～17層確認されている（第12図８）が、Ⅱ区との対比は困難であった。１層が水田耕作土、２～４層がシルト及び砂層、５層以下が黒褐色・灰色系統の粘土層である。

試掘　微高地北側の後背湿地に２カ所設定し試掘を行なった。その結果砂層を除去した時点で東西の畦畔が検出された。また、プラント・オパール分析(註17)により、15層に水田跡の存在が予想され、試掘でも東西方向の畦畔状盛り上りを確認した。

遺構　平安時代の水田跡Ⅰと足跡、平安時代以前の水田跡Ⅱが検出されている。

水田跡Ⅰは砂層（４層）に覆われており、５層上面で確認された(第12図４、写真32)。標高は10.4m 前後である。細長い調査区のため水田１枚を完全に検出することはできず、水田１枚の面積・形状等の詳細は不明である。畦畔は東西方向と南北方向に各１条確認された。その上幅は30～40cm、下幅は70～100cmである。東西方向の畦畔の南側に幅約1.5m 、深さ10cmほどの溝状遺構が確認され、水利施設と考えられる。水田の高低は、水田⑨、⑩がほぼ同レベルで水田⑪が約10cm程低くなる。作土上面および畦畔上に砂層を堆積土とする人・牛の足跡が確認された(写真33～35)。両者とも歩行の方向性は看取不可能であった。足跡数は牛の方が圧倒的多数である。牛の足跡は蹄の先が二股に分れた状態で確認されており、人の足跡も指先の判るものもある。この水田の時期は、砂層中に灰白色火山灰をのせる面が存在することから、平安時代に比定されよう。

水田跡Ⅱは、プラント・オパール分析で予想された15層上面で検出された（第12図５、写真36)。標高は9.8m 前後である。水田の枚数、規模、形状、付属施設は不明である。畦畔は南北方向１条、北西方向２条、北東方向１条が確認された。畦畔の上幅は0.6～2m で大畦畔と考えられるが、対応する小畦畔は検出されたかった。水田の高低差も詳細は不明である。水田跡Ⅱの時期は、水田跡Ⅰより下位ということで平安時代以前として捉えておきたい。

４．まとめ

時代は異なるが微高地上に生活の場、低地に生産の場が確認された。このことは、この一帯に各時期の生活の場と生産の場とがセットで存在しているであろうこと、当該地域が古代の生活の場、生産の場、墓域等を有機的に解明して行く上で重要なフィールドと成り得ることとを示唆するものであろう。

泉崎前遺跡

写真23　水田跡Ⅰ検出状況
（北→南）

写真24　水田跡Ⅱ
検出状況
（北→南）

写真25　東壁土層断面
(西→東)

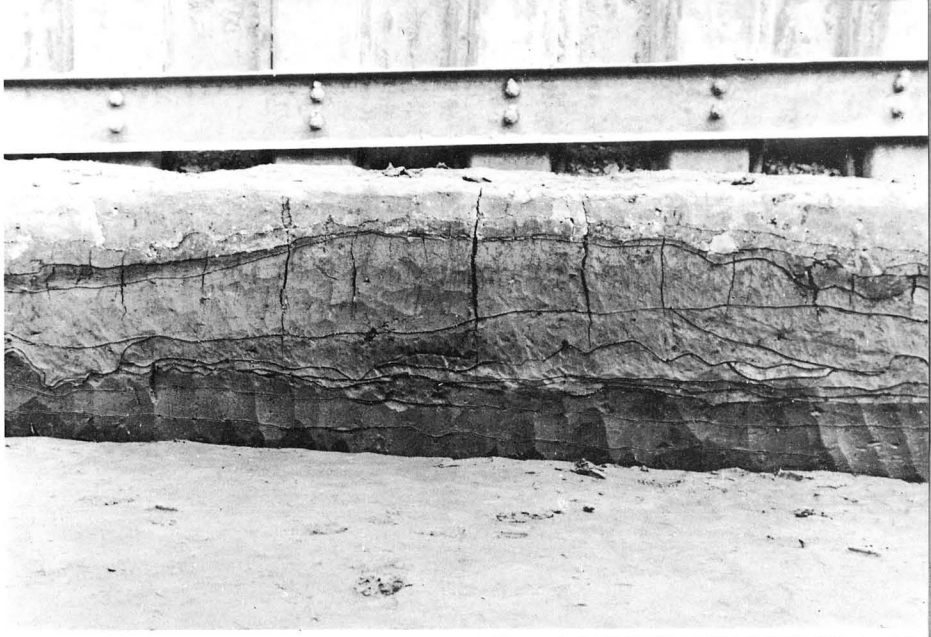


写真26　11層検出
畦畔状遺構
(北東→南西)

写真27　杭列
(東→西)

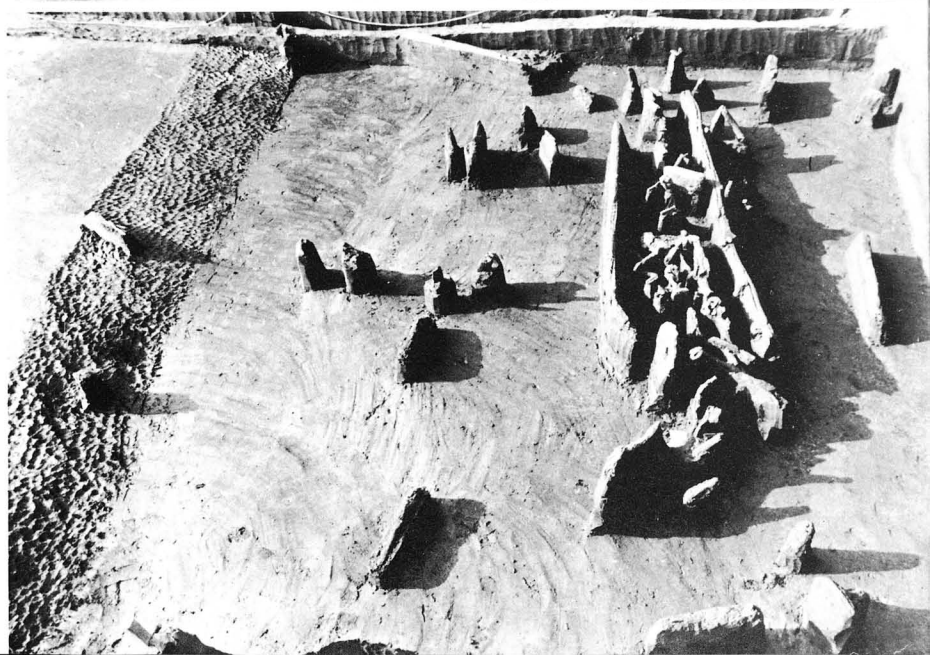


写真28　墓壙群
（北→南）

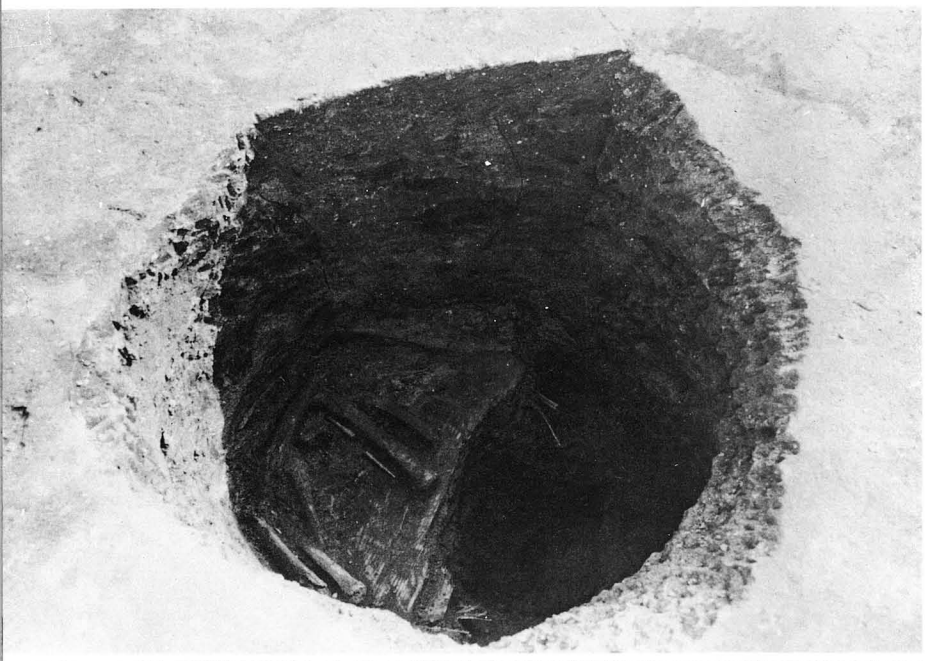


写真29　７号墓壙人骨検出
状況

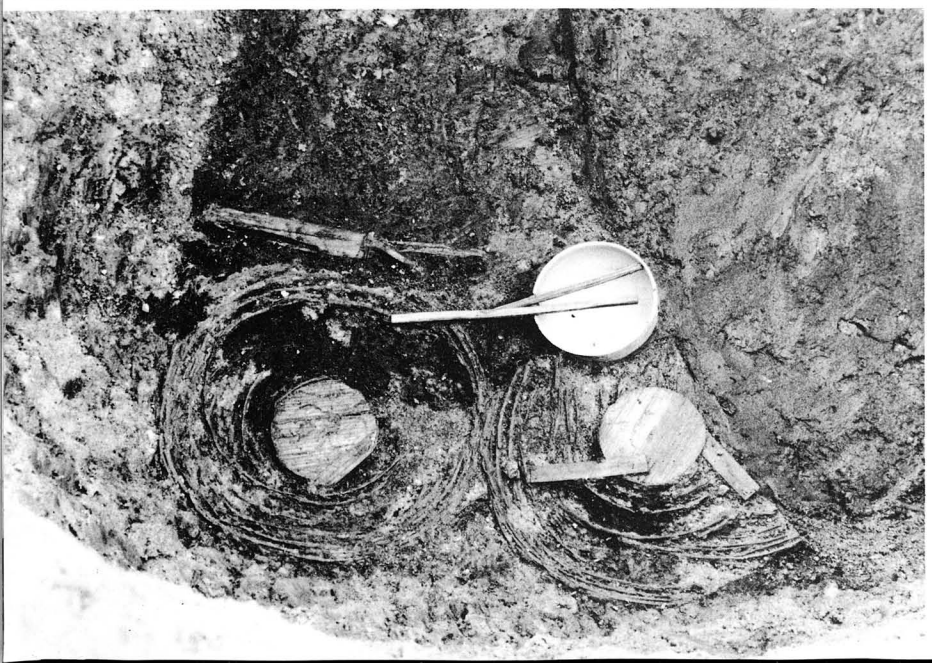


写真30　４号墓壙副葬品
検出状況

写真31　1号住居跡全景
(南→北)

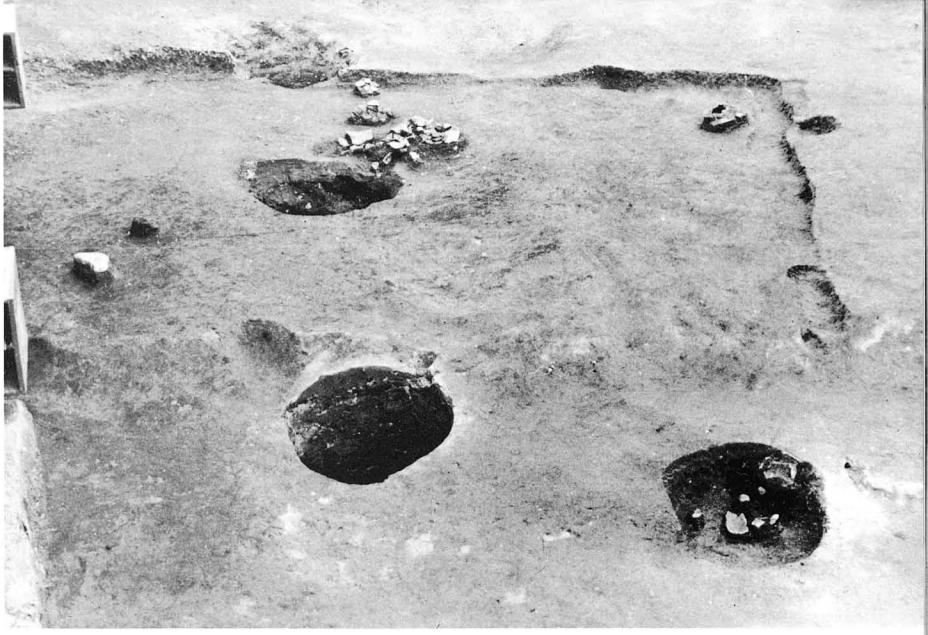


写真32　水田跡Ⅰ畦畔
検出状況
(東→西)

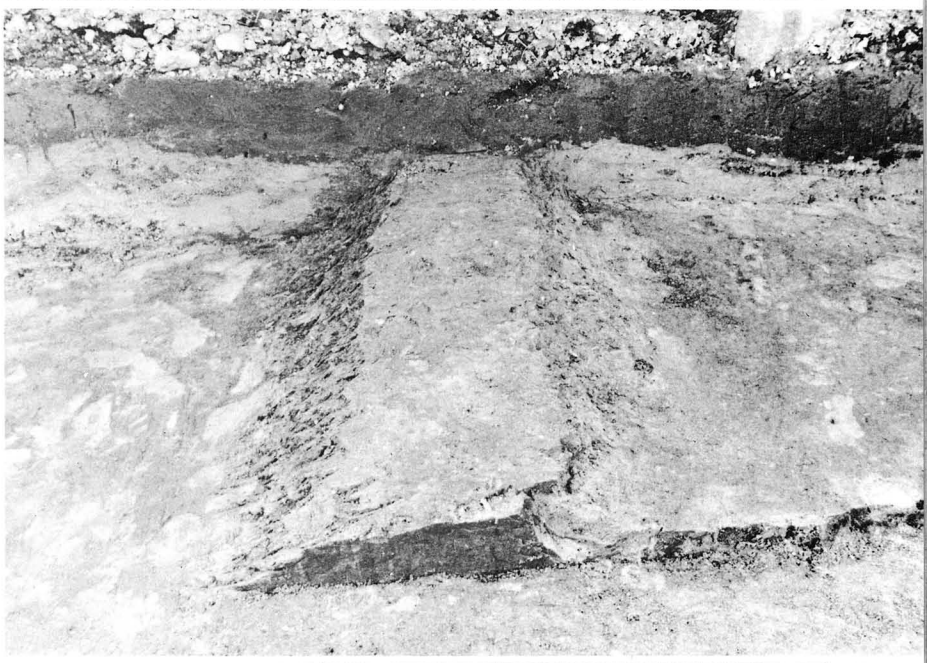


写真33　水田跡Ⅰ足跡
検出状況
(東→西)

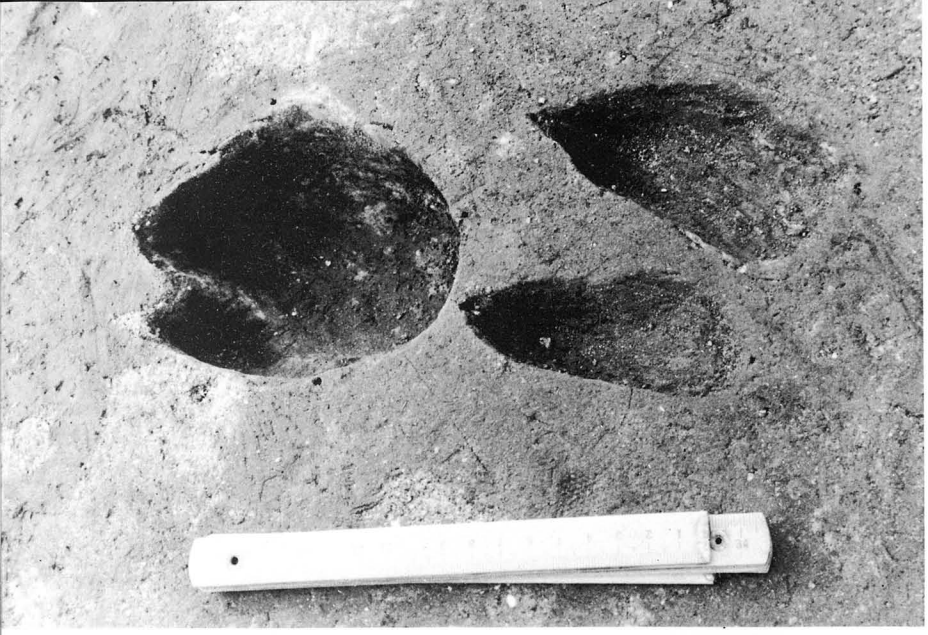
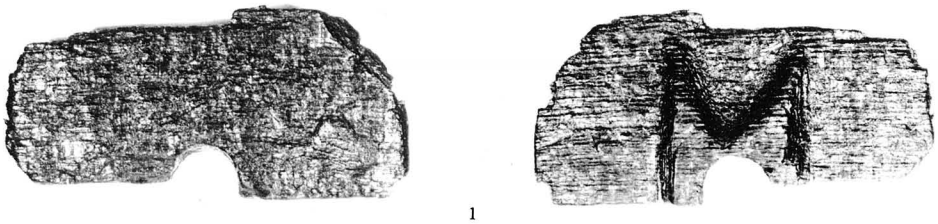


写真34　水田跡Ⅰ牛足跡
検出状況

写真35　水田跡Ⅰ人足跡
検出状況
（東→西）

写真36　水田跡Ⅱ畦畔断面
（南→北）



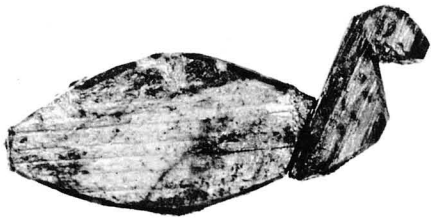
1

2

3

4

5



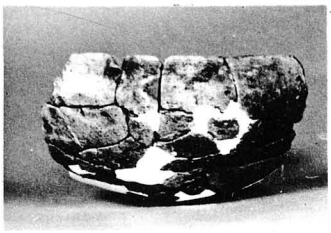
6

7

8

9

11



10

1．泉崎前遺跡　2．泉崎前遺跡
3．泉崎浦遺跡14号墓壙　4．泉崎浦遺跡４号墓壙
5．泉崎浦遺跡７号墓壙　6．泉崎浦遺跡15号墓壙
7．泉崎浦遺跡７号墓壙　8．泉崎浦遺跡７号墓壙
9．泉崎浦遺跡１号住居跡　10．泉崎浦遺跡１号住居跡
11．泉崎浦遺跡１号住居跡

写真37　泉崎前、泉崎浦遺跡出土遺物

Ⅵ. 中谷地遺跡

1．遺跡の立地

中谷地遺跡は、東北本線長町駅の西方約1.2kmに位置し、主に広瀬川によって形成された後背湿地に立地している。現在は土地区画整理事業によって1.0～1.4m の盛土がなされているが、旧水田面標高は11.2～10.7m である。近隣の遺跡としては、東方に鳥居原、南方に泉崎浦、泉崎前などの遺跡が存在する。

2．調査の方法

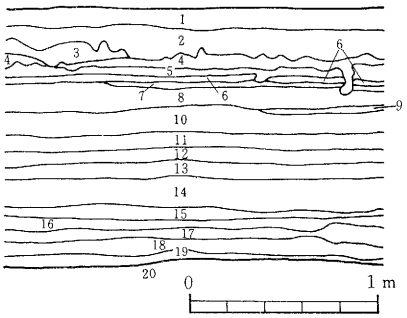
中谷地工区は、仙台市高速鉄道七北田起点より、12.560kmから13.059kmまでの延長499m である。その区間に5×10m のNo 9 ～No20、5×40m のNo21の試掘区を設定し、試掘調査を開始した。その結果、試掘区No 9 ～No13において畦畔遺構が確認されたため、高速鉄道路線幅での本調査に移行した。この本調査部分は、地下埋設管と道路で切られているため、北からⅠ、Ⅱ、Ⅲ区と設定した。また試掘区No21において、鳥居原遺跡（鍋田工区）から続くと思われる畦畔遺構が確認されたが、この部分についての本調査は、来年度実施する予定である。なお、試掘、本調査とも、盛土をバックホーで掘り上げた後、人力による調査を行なった。

3．調査の概要

基本層位は、1～20層まで確認された。その中で検出された遺構は、中世と思われる水田跡1面と、平安時代の水田跡1面である。

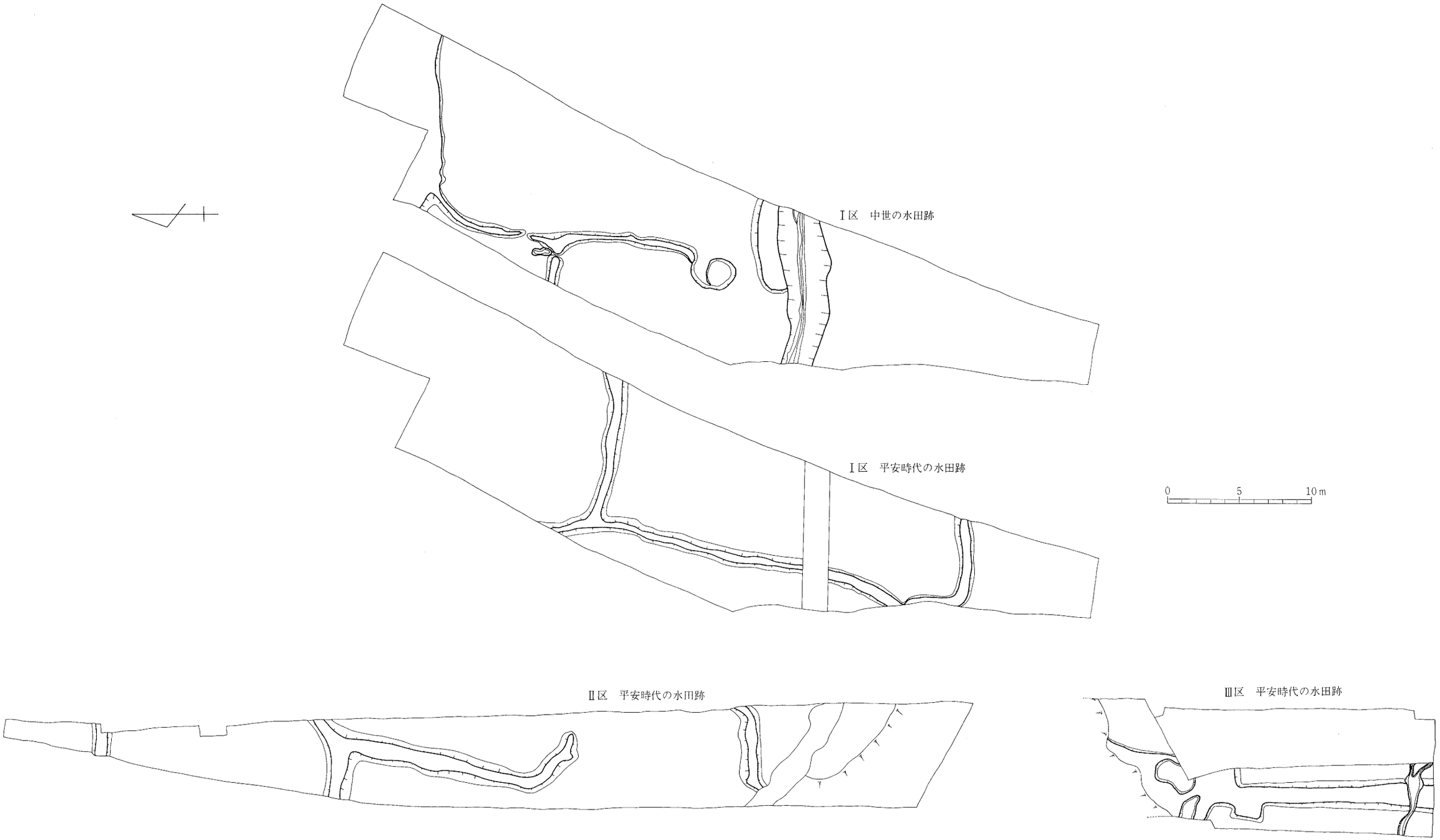
中世と思われる水田跡は、基本層位第3層上面で検出された。この水田跡は、Ⅰ区でのみ検出され、水口なども確認された。しかし水田の一区画は判明しなかった。なおⅠ区北側試掘区No15の同層からは、北宋銭などが出土している。

平安時代の水田跡は、基本層位第4層上面で検出された。この水田跡はⅠ・Ⅱ・Ⅲ区において、畦畔の上部に灰白色火山灰(註18)が堆積した状態で確認された。水田の一区画は判明しなかったが、Ⅰ区において検出した畦畔の間隔は26m 程である。



第14図　基 本 層 位

層位	土　色	土　性	備　考
1	7.5Y 3/1黒色	砂質シルト	石英を多量に含む
2	10YR 5/2灰黄褐色	粗　砂	石英、パミスを含む
3	5YR 1.7/1黒色	砂質シルト	石英、パミスを含む
4	7.5Y 4/1灰色	粗　砂	石英を含む
5	5GY 5/1オリーブ灰色	細　砂	炭化物が互層状に混入する
6	7.5YR 1.7/1黒色	シルト	植物遺体を含む
7	10YR 3/1黒色	粘　土	植物遺体を含む
8	5YR 1.7/1黒色	シルト	植物遺体を含む
9	10YR 1.7/1黒色	粘　土	植物遺体を含む
10	2.5Y 4/2暗灰黄色	粘　土	炭化物が互層に入り植物遺体を多く含む
11	2.5Y 3/1黒褐色	粘　土	植物遺体を含む
12	10YR 1.7/1黒色	粘　土	植物遺体を含む
13	5YR 1.7/1黒色	粘　土	非常に多量の植物遺体を含む
14	7.5YR 3/1黒色	粘　土	植物遺体を含む
15	10YR 3/1黒褐色	粘　土	植物遺体を含む
16	7.5YR 3/1黒褐色	粘　土	植物遺体を含む
17	2.5Y 5/2灰黄色	粘　土	炭化物が互層に入る
18	10YR 3/1黒褐色	粘　土	植物遺体を含む
19	10YR 3/1黒色	粘　土	若干の植物遺体と石英を含む
20	5Y 5/1灰色	砂質シルト	



第15図　遺構平面図

写真38　Ⅰ区中世と思われる水田跡全景（南→北）

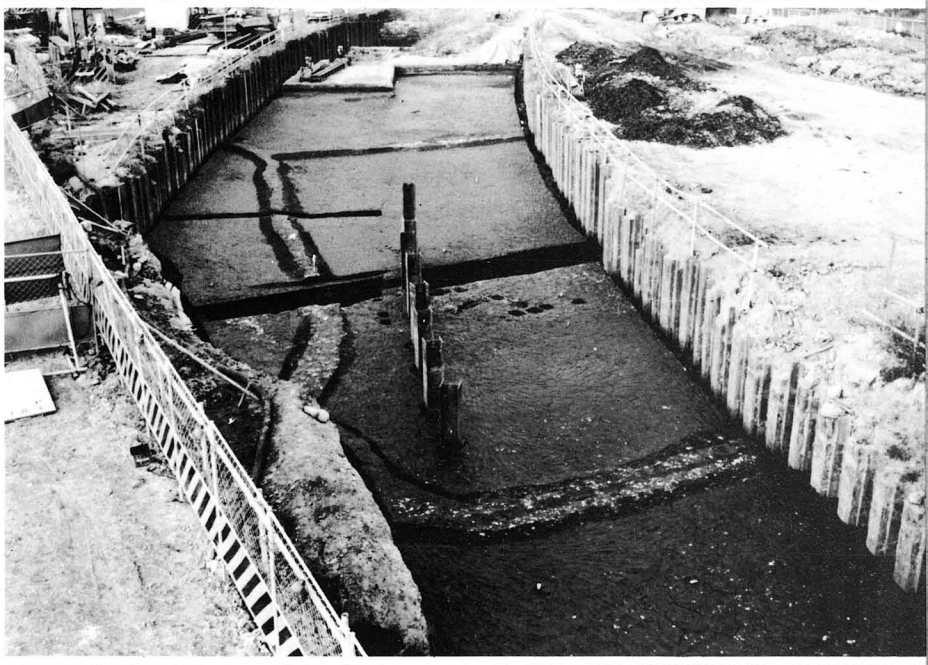


写真39　Ⅰ区平安時代の水田跡全景（南→北）

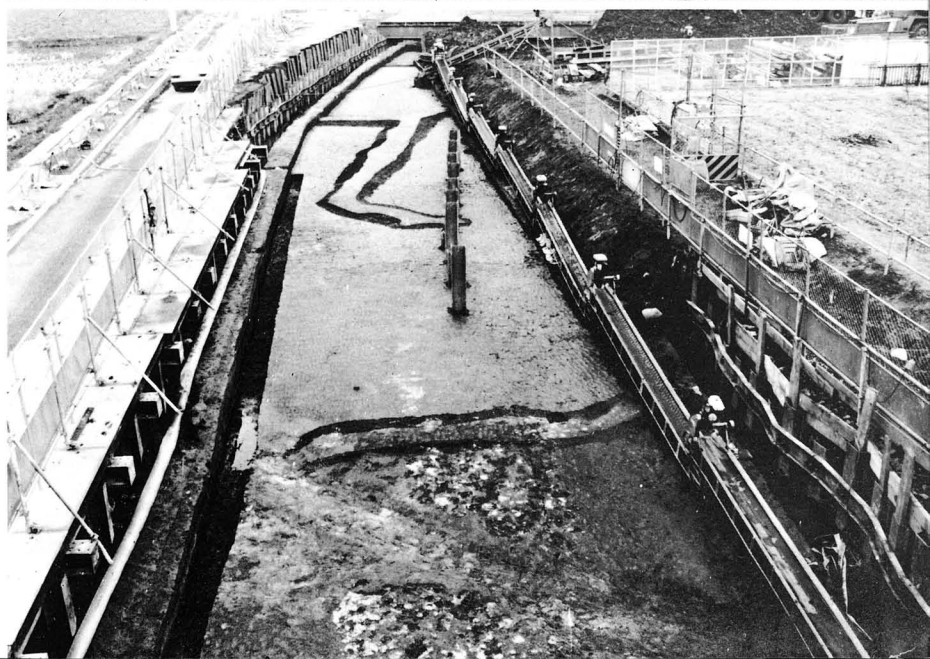


写真40　Ⅱ区平安時代の水田跡全景（南→北）

Ⅶ. 鳥居原遺跡

1．遺跡の立地

鳥居原遺跡は、東北本線長町駅の西方約800m に位置する。主に広瀬川によって形成された後背湿地に立地し、標高は10～11ｍである。調査対象区域は、高速鉄道南北線の起点七北田より12.316km～12.560kmの（仮称）鍋田駅部分であり、面積は4145㎡である。この区域は本遺跡の北部にあたる。近隣には金岡八幡古墳、中谷地遺跡、泉崎浦遺跡、袋東遺跡がある。

2．調査の方法

12.407km～12.512km間に７ケ所のトレンチ（６×８ｍ）を設け、試掘調査を行なった。その結果、水田跡であることが確認されたため(註19)、今年度は対象区域の東半12.316km～12.420kmの本調査を行なった。尚、12.420km～12.560kmは来年度調査予定部分である。

3．層　　位

基本層位は１層から30数層まで確認されたが、本遺跡で共通する層位は１～８層までである。９層以下は深掘り、試掘により確認された層であり、詳細な検討を加えていないため現段階では対応関係は不明である。１～８層は１層旧耕作土、２層シルト層、３層粘土層、４層以下の泥炭層から成り、３層上面には平安時代に降下したと考えられる灰白色火山灰(註20)が部分的に見られる。また４層以下の泥炭層の堆積は９層以下でも、部分的に砂層を挟みながらではあるが、連続してみられ、ある層から砂層へと変化する。この砂層下には沖積層の基底礫層(註21)が存在するが、確認することはできなかった。尚、本調査深掘り区33層は火山灰(註22)の堆積層である。

4．調査の概要

今回の調査では、２時期の水田跡を検出した。新しい時期の水田跡は３層上面で検出され、灰白色火山灰によって部分的に覆われているので平安時代の水田跡と考えられる。畦はほぼ南北方向に走っている。しかし試掘区で検出されただけであるので、一区画の面積やその他の関連遺構については不明である。

また、平安時代の水田跡よりも50～60cm下位の７ｃ層上面で、７ｂ層との色調の相違から、更にもう一面の水田跡を検出した。大畦(註23)には、Ｎ－32°～37°－Ｅ、Ｎ－56°・59°－Ｗの2つの方向があり、幅は下端幅で170～220cmである。畦は周囲の土を盛り上げてつくられており、その断面形は扁平な台形状を呈する。水田面は大畦によって高位の面と低位の面に画される。低位の水田面からの畦の立ちあがりが急激であるのに対して、高位からのそれは非常にゆるやかである。畦を形成する土と耕土は色調・土性において若干の差異が認められる部分もあるが、それほど明瞭ではない。大畦間からは小畦が一部分において検出された。それを形成する7c層は非常に軟かく、小畦の大半は土圧によって潰されているようである。しかし、部分的に検出され

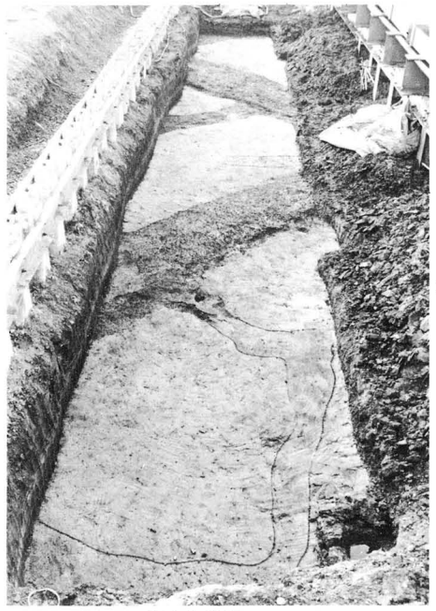
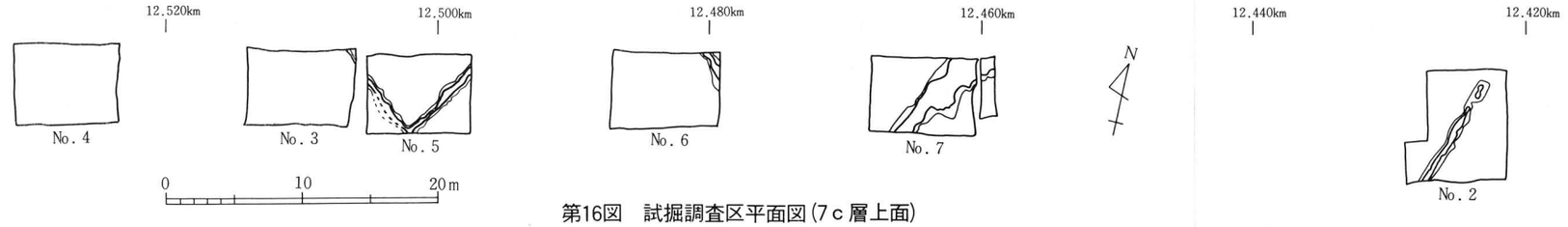
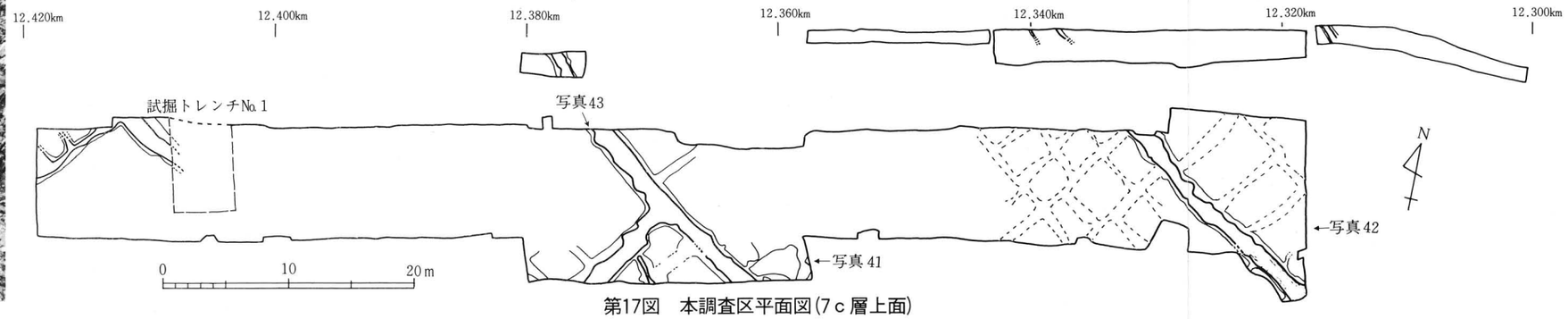


写真41　畦検出状況



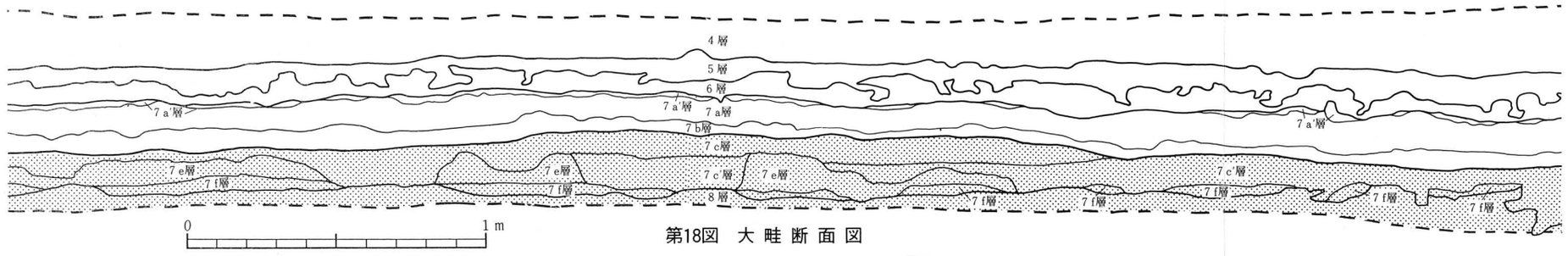
第16図　試掘調査区平面図(7c層上面)



第17図　本調査区平面図(7c層上面)

土層注記

層位	土色・土性	
4	10YR1/7黒色粘土と5Y5/1灰色粘土が互層になる	泥炭層
5	2.5Y7/2灰黄色粘土	
6	10YR5/2灰黄褐色粘土	
7a'	2.5Y5/2暗灰黄褐色粘土	
7a	10YR1/7黒色粘土	
7b	10YR4/1褐灰色粘土	
7c	2.5Y3/2～3/1黒褐色粘土	
7c'	10YR3/1黒褐色粘土	
7e	10YR3/1黒色粘土と10YR5/1褐灰色粘土が互層になる	
7f	7.5Y4/1褐灰色粘土	
8	10YR1/7黒色粘土	



第18図　大畦断面図

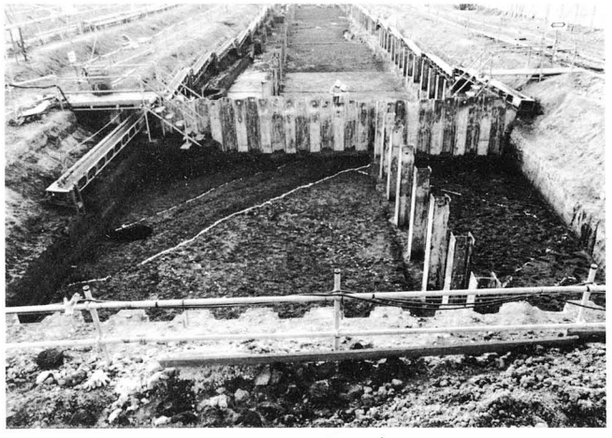


写真42　本調査区全景

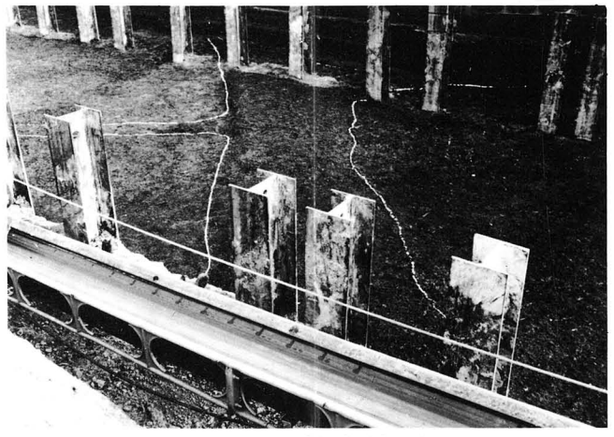


写真43　畦検出状況

写真44　土層断面（試掘トレンチNo. 6）

たところでは、小畦の方向は大畦に直交もしくは平行する傾向が強く、この水田跡は規格性をもった水田形態であるといえる。確認された水田は、２×３～4×6.5mの方形に区画されており、面積は約６～26m²である。また、本調査区における水田面の標高は8.4～8.8mであり、西方が高く東方に向かって徐々に低下している。水田面には凹凸がみられ、人間の行動の痕跡を示すものと考えられる。その一部は足跡と判断されたが、歩行方向を追うことはできなかった。

また、大小の畦・足跡以外に、一部で大畦と小畦の接合部に杭列が検出されている。しかし明確な灌漑・排水のための施設と考えられるような遺構は確認されていない。出土遺物は非常に少なく、土器片２点のほか、木製品・木片・クリとクルミの実が出土したのみである。ただ、それが畦中・畦上及びその付近からのみ出土していることは興味深い。出土した土器片はきわめて小さく、それによって時期を決定することはできないため、現時点においてはこの水田跡は平安時代以前に属するものとしかいえない。この水田跡は、鉄分・マンガンの集積層がその床土にみとめられず、後背湿地であるという立地ともあわせて、中間型・地下水型といわれる半湿田・湿田(註24)であった可能性を指摘できよう。

註

註１）　地団研仙台支部編　1980　『新編　仙台の地学』

註２）　経済企画庁　1967　『地形・表層地質・土じょう　仙台』

註３）　中田　高他　1976　「仙台平野西縁・長町―利府線に沿う新期地殻変動」『東北地理』第28巻第２号　p. p. 111～120

註４）　松本秀明氏の御教示による。

註５）　文様に対する呼称は原則的に菅生田遺跡（1982.9）に依った。

註６）　この文様の土器は、「∫」字状文様・玉抱連続変形「S」字状文様の土器と共に７号住居跡堆積土５層中より出土していることから一応大木10式第ⅡB段階として扱った。今後５層出土の土器の吟味を行ない明確に伴うものなのか本報告にゆだねたい。

註７）　沼津貝塚保存管理計画策定事業報告書（第17図版２、第20・21図版）や六反田遺跡（第46図）に方形区画文のものが報告されており、大木10式最終段階に位置づけられている。

註８）　調査は工事工区ごとに実施したため、泉崎東工区の本調査３カ所を便宜上南からⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区と呼称した。

註９）　松本秀明　1981　「仙台平野の沖積層と後氷期における海岸線の変化」『地理学評論』第54巻第２号　p. p. 72～84

また、仙台市では高速鉄道南北線建設に伴なうボーリング調査を行なっており、その結果によると基底礫層の上面の標高は鳥居原遺跡で２～３ｍ、中谷地遺跡で３～５ｍ、泉崎浦遺跡で４ｍ、泉崎前遺跡で７ｍ、下ノ内遺跡で８ｍである。

註10）　庄子貞雄・山田一郎　1980「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡―昭和54年度発掘

調査概報―』p. p. 97～102

白鳥良一　1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ、p. p. 1～38　宮城県多賀城跡研究所

なお、泉崎前遺跡・鳥居原遺跡の灰白色火山灰については分析は行なってはいないが、庄子貞雄氏に来跡いただき、宮城県に分布する灰白色火山灰と考えられる旨の御教示をうけた。また泉崎浦遺跡・中谷地遺跡で確認された灰白色火山灰も同様のものと考えられる。

註11)　試掘の段階で宮崎大学の藤原宏志氏にプラント・オパール分析を依頼した。その結果、4・11層に水田跡の存在が予想されるとの御教示を得た。

註12)　仙台市教委　1980「山口遺跡」現地説明会資料

山口遺跡では平安時代の水田跡が検出されている。現在報告書作成中。

註13)　南から落ちこむ状況を確認したに過ぎず、溝状か、河川状か、沼状であるかは不明。一応「溝状」と呼称しておく。

註14)　註8参照

註15)　東北大学医学部の山田格氏の御教示による。

註16)　江戸時代の墓壙群検出面より標高が高いのは、住居跡がもともと微高地であった旧畑地に埋蔵されていたためである。

註17)　宮崎大学農学部の藤原宏志氏の御教示による。

註18)　註10参照

註19)　試掘トレンチNo.2において、7c層上面で畦状の盛り上がりを検出したため、基本層3～11層のプラント・オパール分析を宮崎大学の藤原宏志氏に依頼した。その結果、7c層にはイネのプラント・オパールが含まれていることが確認され、当試掘トレンチが水田跡であったか、近傍に水田があったかのどちらかであるとの御教示を得た。また試掘調査の進展に伴ない、他の試掘トレンチでも同様に7c層上面で畦が検出されるに及び、調査対象区は水田跡であることが明らかとなった。

註20)　註10参照

註21)　註4・註9参照

註22)　33層は庄子貞雄・山田一郎両氏による分析の結果、火山灰であることが明らかとなった。その詳細については現在継続して分析中である。

註23)　畦畔に関する用語についての充分な検討を行なっていないので、今回はとりあえず、区画の基軸となる太い畦畔を大畦、それに較べて細く大畦間にみられる畦畔を小畦とした。用語の整理、検討は本報告で行ないたい。

註24)　八賀　晋　1968　「古代における水田開発―その土壌的環境―」『日本史研究』96　p. p. 1～24

八賀　晋　1971　「古代の農耕と土壌」『古代の日本』2 p. p. 23～40

参 考 文 献

篠原信彦他、1982、3　「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ」仙台市文化財調査報告書第40集

田中則和他、1981、12　「六反田遺跡」仙台市文化財調査報告書第34集

丹羽　茂　1981、11　「大木式土器」『縄文文化の研究』第4巻　雄山閣

丹羽・阿部・小野寺　1982．3　「菅生田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅶ」宮城県文化財調査報告書第92集

芳賀良光　1968、12　「宮城県宮古島貝塚梨木囲遺跡の研究」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城教育大学歴史研究会編

中村・三塚・阿部・佐藤　1975、4　「沼津貝塚の考古学的調査」『沼津貝塚保存管理策定事業報告書』石巻市教育委員会

渡部弘美・主浜光朗他　1981、3　「山田上ノ台遺跡」仙台市文化財調査報告書第30集

後藤勝彦他　1975、4　「中沢遺跡発掘調査報告」『川崎町史』川崎町史編纂委員会

職　員　録

社会教育課

課　長　永野昌一
主　幹　早坂春一

文化財管理係

係　長　大沢隆夫
主　事　山口　宏
〃　　渡辺洋一

文化財調査係

係長(兼)　早坂春一
教　諭　佐藤　隆
〃　　渡辺忠彦
〃　　佐藤　裕
〃　　加藤正範
主　事　田中則和
〃　　結城慎一
〃　　成瀬　茂
教　諭　青沼一民
主　事　柳沢みどり
〃　　木村浩二
〃　　篠原信彦
〃　　佐藤　洋
〃　　金森安孝
〃　　佐藤甲二
〃　　吉岡恭平
〃　　工藤哲司
〃　　渡部弘美
〃　　主浜光朗
〃　　斎野裕彦
〃　　長島栄一
〃　　荒井　格
派遣職員　高橋勝也
嘱　託　鈴木　実

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第１集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年４月）
第２集　仙台城（昭和42年３月）
第３集　仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年３月）
第４集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年３月）
第５集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年８月）
第６集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第７集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年３月）
第８集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年５月）
第９集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年３月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年３月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年３月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年３月）
第13集　南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―（昭和53年３月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年３月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年３月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第２・３次）のあらまし（昭和54年３月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年３月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年３月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年３月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年３月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告１（昭和55年３月）
第22集　経ケ峯（昭和55年３月）
第23集　年報１（昭和55年３月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年８月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年３月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年３月）
第28集　年報２（昭和56年３月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ―昭和55年度発掘調査概報―（昭和56年３月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年３月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年３月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年３月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年３月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡郡市計画街路建設工事関係第１次調査報告（昭和57年３月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年３月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ―昭和56年度発掘調査報告書―（昭和57年３月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ―昭和56年度発掘調査概報―（昭和57年３月）
第39集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年３月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年３月）
第41集　年報３（昭和57年３月）
第42集　郡山遺跡―宅地造成に伴う緊急発掘調査―（昭和57年３月）
第43集　栗遺跡（昭和57年８月）
第44集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
第45集　茂庭遺跡発掘調査報告書　（昭和58年３月）
第46集　郡山遺跡発掘調査報告書　（昭和58年３月）
第47集　仙台平野遺跡発掘調査報告書　（昭和58年３月）
第48集　史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年３月）
第49集　仙台市文化財分布調査報告Ⅰ（昭和58年３月）
第50集　岩切畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第51集　仙台市文化財分布地図（昭和58年３月）
第52集　南小泉遺跡―都市計画街路建設工事関係第２次調査報告（昭和58年３月）
第53集　中田畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第54集　神明社窯跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第55集　南小泉遺跡―青葉女子学園移転新営工事地内調査報告（昭和58年３月）
第56集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年３月）

第57集　年報４（昭和58年３月）
第58集　今泉城跡（昭和58年３月）
第59集　下ノ内浦遺跡（昭和58年３月）
第60集　南小泉遺跡―倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書―（昭和58年３月）

仙台市文化財調査報告書第56集
昭和57年度
仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ
昭和58年３月
発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町３－７－１
仙台市教育委員会社会教育課
印刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24－24　ＴＥＬ63－1166